書評

第115号

【特集】

〈読書案内〉

上井久義／田中欣和
植村邦彦／若森章孝

【連載】

日本中国　ことばの来往（ゆきき）　その60　芝田稔

〈研究余滴〉フランス詩の歴史（その九）　山村嘉己

おいてけぼり―宮本輝試論X―　芝田啓治

新連載・「知的大衆」たる在日朝鮮人二世のつぶやき　玄善允

関西大学生協組織委員会内『書評』編集委員会

特集●読書案内

文学部　上井久義先生の読書案内 …… 4
文学部　田中欣和先生の読書案内 …… 7
経済学部　植村邦彦先生の読書案内 …… 10
経済学部　若森章孝先生の読書案内 …… 13

連載

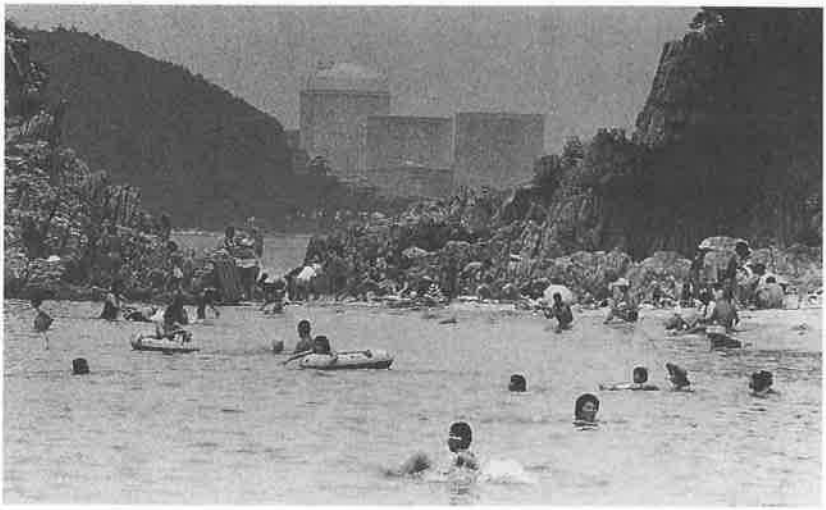
日本中国ことばの来往（ゆきき）　その60 …… 芝田　稔 16
〈研究余滴〉フランス詩の歴史（その九） …… 山村　嘉己 24
おいてけぼり――宮本輝試論X―― …… 芝田　啓治 31
新連載
「知的大衆」たる在日朝鮮人二世のつぶやき …… 玄　善允 37

短評

「ウィニングボールを君に」――山際淳司著 …… 谷井　康彦 72
「子どもの本を読む」――河合隼雄著 …… 乗道　盛 75
羅針盤 …… 1
編集後記 …… 78

題字■網干善教（元文学部教員）

1999.12 羅針盤



東海村にある核燃料再処理工場での臨界事故は私たちに改めて原子力の持つ恐ろしさを認識させた。しかし、今回の事故はなにも予測不可能な特別な事態ではなかったといえよう。今回の東海村の事故は重大な事故として大きく報道されたが、これ以外にも原子力関連施設（原子力発電所、核燃料再処理工場など）に於ける事故は日常茶飯事に起きているのだ。

それは東海村だけを例にとっても明らかで、一九九七年三月に起きた再処理工場での爆発事故を始め、再循環系の事故率全国二位、主蒸気弁関連事故率全国一位というほど事故が頻発しているのだ。特に一九九七年の爆発事故では三七人もの労働者が被曝したと言われているが、これは「動燃（核燃料サイクル開発機構）」の発表に基づくデータであり、被害がこれだけで留まっているかは非常に疑問である。

ご存知のように原発などで使われる放射性物質（放射能）は放射線を出し、それに被曝すると、ガンや白血病、火傷などの障害を起こし、なおかつ当事者だけでなく、その子供にも影響が生じる可能性が高いことがわかっている。しかも、それら危険な物質は処理される方法も無く、原子力を扱うこと自体、そもそも無謀な話といえよう。これでは原子力施設が「トイレのないマンション」

と例えられるのも無理はない。

では、なぜそのような原子力施設が今なお建設され、運営されているのか。

そこには原子力施設を推進する大企業や政府の利権が渦巻いているのである。

日本を始めとする先進国は第二次世界大戦以降のエネルギー不足の中、原子力を「高効率（原子力反応というのは同じ質量の燃料の化学反応エネルギーに対し、約一〇〇万倍のエネルギーを生み出す）」で「安価」、そして煙も出さず二酸化炭素の排出量も少ないことを理由に「クリーン」なエネルギーとして開発を進めてきた。

しかし原子力は、原子力施設推進派のいうように「クリーン」なエネルギーなどでは決してなく、「高効率」「安価」「クリーン」というプラスのイメージは放射能の危険を原発労働者や、地方に押しつけるためのキャンペーンにしか過ぎないのだ。

原発で働く労働者に関しては岩波ブックレット「知られざる原発被曝労働」に詳しく描かれている。そこでは被曝労働の過酷な現実が記されており、原発労働者は企業の杜撰な被曝管理によって放射線被曝を余儀なくされながら作業をしているという。そして一般人に定められている被曝線量限度の一〇倍以上にあたる年間一〇ミリシーベルトの放射線を被曝し、そのために白血病やガンになる可能性が高く、現に毎年多数の被曝労働者が死亡しているというのだ。しかし法律的には放射線作業従事者は年間五〇ミリシーベルトの被曝が許容されており、何の問題も無いというのだ。ごく僅かでも人体に影響のある放射線に許容量などないのではないか。

また一方で原子力施設が地方に押しつけられる現状がある。地方は長年、農・漁業中心にして産業を成り立たせてきた。しかし近年における政府の農・漁業切り捨て、重工業化、新たなエネルギー政策といったものにより地方の農・漁業は切り捨てられる形となった。そして地方財政が緊迫したのにつけ込み、政府は「産業活性のため」「雇用を維持するため」という宣伝によって原子力施設を押しつけていったのである。

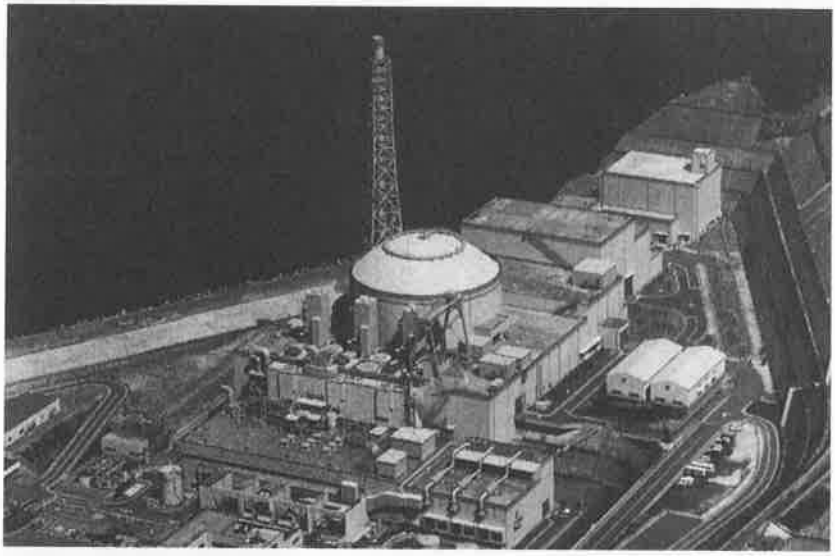
東海村などでは財政収入の大半を占める固定資産税がほとんど原子力施設によって賄われており、原子力施設無しでは財政が維持できない情況になっている。そのためにこうした地方の住民はいつも放射能汚染という危険に取り囲まれながら暮らしていかなくてはならないのだ。

原子力政策は労働者や地方といった「弱者」に矛盾を集中させていると同時に、けっしてそうした「一部の問題」ではなく、気付かぬうちに私たちの身の周りにも存

在しているのだ。

原発を動かすための核燃料は、日頃私たちのすぐ側の道路で運搬されているし、大きな事故が起これば、放射能による汚染は地方だけの規模では済まない。

今回東海村で起こった事故をきっかけに、原子力問題を私たちの生命に関わる問題として「原発はいらない」という立場から声を挙げていかなくてはならないのではないか。



国立歴史民俗博物館編

『民俗学の資料論』

（吉川弘文館、一九九九年。定価二〇〇〇円）

上井久義
文学部教員

この本は、大学院の教員が高校生にも充分に理解できるやさしい表現で、院生たちに語りかけた意欲的な論文集である。読者は編者の意図にそって掲載の順に読み進むのが本来であるが、ここではまず最終の論文である館長佐原真氏の「考古学と民俗学」から読みはじめることをすすめたい。

論者の立場上そうなのであるが、この博物館は考古・歴史・民俗の三分野で総合的な歴史を究めるのが目標であるという。したがって文献史料の他に、遺跡・遺物や民俗資料を加えて、より多様な実態に迫れる作業をすすめている。潜水漁法を例にとる。文献史料ではアワビをとる道具の名称をノミという。その実態の資料は考古学の成果から、またその使用方は民俗資料によって再構成を試みる。当然の方法のようであるが、現実には互いに補完しあえる状況にはなっていないことが多い。またこの三者に対して、男と女で違う結論を導きうる「男女差のある学問」と考え、女性ならではの価値観による研究者の登場を期待している。

比嘉政夫氏は、社会人類学の研究者で、主として南西諸島の社会組織の分析を続けている。ここでは「門中」と称する沖縄の親族組織をテーマとしてとりあげている。従来から、父から男児へと家が継承されていく父系血筋尊重の集団として理解されてきた。これに対して琉球中山王府が認める各士族の家譜を分析して、歴史的変化を探ろうと試みている。その結果、父系血筋尊守の慣行は、比較的新しいものである可能性が見えてきたという。社会構造も時間軸

にそって揺らいでいることになる。

福原敏男氏は、三重県津市にある津八幡宮の祭礼をとりあげる。日本中世の祭礼史を研究してきた氏が、ここでは近代から現在に至る津まつりの消長を時間軸にそって事細かく追っている。まつりといえば、それだけでいつの時代とも知れぬ古い伝統が残されているような先入観で眺めてしまうが、津八幡宮祭礼とは分

離した市民参加型新興イベントによって構成されていることを跡づけている。行政も積極的に関与して町興しに力を入れたが、現在はまつり関係者による家族連れのイベントになりつつあるという。そんな今、津まつりは京都の祇園祭りや大阪の天神祭りのような都市を代表する顔としての「歴史」がほしいのだという。市民のなかには、かつて祭礼の中心となった山車の復活ができていないからだと考える者もいるが、これを支える町組の組織や旧城下町としての景観をなくしている状況では現状が当然のなり行きではないかと見ることもできるという。民俗資料が、時には社会の発展を妨げる存在となり、因習として忌避されることもあるが、歴史の風化によって、その伝承も危ぶまれる都市祭礼も存在し、それらの再検討の要を考えさせられる好論である。

朝岡康二氏は、庶民が日常の生活で使用してきた民具の研究者である。従来、民具は現在の時点で存在をしている物として研究の対象に扱ってきた。この視点に対して、これはあくまで「現在完了形」としてとらえるべきで、現時点に至る伝世の完了過程に視点を置いた研究に注意を喚起しようとしている。それも「モノ」と「ヒト」の関わりの面にそった調査を提唱している。現在に伝世された民具を通して、ここに至る累積された日常文化を、時間の遡及にそったデータの構築を試みようとするのであろう。文中でいたるところに注が付され、誤解を招かぬように気くばりがなされているが、言いわけのようにも見えて、新しい民具研究の方向を打ちだすにあたっての配慮が伝わってくる。

新谷尚紀氏は、日本の伝統的な墓地の形態と他界観についての包括的

な研究を重ねてきたが、ここでは、芸北神楽の映像制作にあたっての問題点が詳細に報告されている。各地の神楽がそうであるように、第二次世界大戦後、神社神道と結びついていた神楽に対する関心が薄れていった。そこで謡曲や御伽草子を題材にした新しい神楽が創作され、余興や娯楽としてもてはやされるようになった。このことが旧舞を保存する動きを触発し、有田神楽が民俗文化財に指定された。その結果、テレビ番組に出演したり、ホテルの特別ショウに登場することになり、観客うけをねらった刺激的なものへと変化していった。しかし「八岐大蛇」という同じ演目を演じ続けることになり、観客の関心が遠のく傾向にあるという。他方では新しい神楽を求めて、創作神楽が演じられ、神楽ファンを引きつけている。文献史学が厳密な史料批判の上になりたっているように、各神楽に対してもその成立要素を遡及し、個々の資料批判とも云うべき作業のうえに立って映像記録化がはかられた過程が記されている。

小林忠雄氏は、都市における民俗事象を研究の対象としている。ここでは都市化した一地域に視点をすえて、色・音・においがどのような変化を遂げたかを辿ろうとしている。これらがどの様な象徴機能と標識機能をもっているのかを検証したうえで、研究の一層の深化が望まれる。

全編を通して感じることは、従来の研究では考えられなかった資料を、最大限に活用して分析を試みる意欲がうかがえて新鮮である。大学生たるものは、入学することによってそれぞれの専門分野に入門し、以降は研究領域をより絞ってその深化をはかるとする道を辿る者が多い。ところがここで見られる傾向は、学問の領域を越えた資料と方法論を綜合することに新しい方向を見いだそうとしている。これが大学院生向けになっているのは、この博物館が大学院大学としての役割りをになっているということと、現在の大学が学問分野ごとの専門教育に力点があると見たことによるのであろうが、より若い柔軟な考えの持ち主である大学新入生に軽い読み物として一読されることを薦めたい。

（うわい　ひさよし）

シベリア捕虜収容所『「ラーゲル」の中の青春』
――一学徒兵五十五年目の回想――

鈴木　祥蔵　著

（明石書店、一九九九年。定価一二〇〇円）

田　中　欣　和
文学部教員

戦中と戦後はつながっている。戦中世代の体験は戦後のその人の生き方を規定し、その世代の活動が今に至る戦後社会の基盤を作ったからだ。勿論、一つの世代は多様な体験をした人々で構成されている。戦争体験の風化ということがいわれるが、若い人々も、伝記でも、せめて取材のしっかりした小説でもいいから、その時期のいくつかの典型的な生き方を知ってほしいと思う。そうしなければ自分たちの世代がその上に投げ出されている土壌を理解できなくなるからだ。中学・高校の歴史教育が第二次大戦のことは馳足ででも通ればまだしもいい方になっている今、戦中世代の体験を学ばせてくれる良書を選んで、生協などはイヴェントをやってほしい位のものだ。

そういうことを考えていた私のおすすめはまず本書である。著者は本学名誉教授。教育学科創設の中心人物であり、全共闘時代に文学部長でもあった。本学の部落問題に関わる取組みをリードされた方でもある。本学のみならず、全国的にも解放教育・保育運動に大きな影響を与え続けて来られた。本年八十歳になられたが、手術の後遺症で手が不自由になられたにもかかわらず、口述筆記によって本書と『親鸞と人間解放の思想』の二冊を相次いで明石書店から出された。出版記念会でお会いした時に「死ぬまでに書いておこうと思って」といっておられたから、本書は若い世代にどうしても伝えておきたいメッセージなのだと私は理解した。

第二次世界大戦の終末ギリギリになって参戦したソ連は多くの日本人

を数年にわたってシベリアに抑留し、開発のための労働力とした。スターリン主義の罪の一つである。学徒出陣組の鈴木先生は終戦の日に見習士官から少尉になる。シベリアの「ラーゲリ」（捕虜収容所）で二つの闘争を行うことになる。一つはソ連軍の悪徳将校と、もう一つは日本人捕虜の中の悪質分子と。本書はこの二つの闘争を軸に思想形成していった

著者の「青春の記録」である。

木材の伐採に従事する捕虜たちの食糧は乏しかった。スターリンの弾圧でシベリアに追われて来た共産党員グルジーノフが伐採の作業員として加わっていたが、彼はソ連軍中隊長が食糧横流しでもうけているという。若き鈴木少尉はグルジーノフと協力してその不正を暴き、ソ連軍上部機関に報告する。捕虜の身で勇気のいることであった。調査団がやって来て、結局、中隊長以下収容所の衛兵全員が更迭され、それまでの不足分食糧がまとめて支給された。ソ連軍にともかく正義が通用してみると、日本軍が現地調達と称して、中国民衆から食糧を強奪し、抵抗するものを射殺していたことが想起され、「聖戦」の意味を自覚させることになる。

国際的慣行ではあろうが、ソ連軍も捕虜のうちの将校と兵士は別待遇にした。食糧もタバコも配給量がちがう。しかし、鈴木少尉はもう一人の将校であった軍医と共に将校と兵士を平等にしてしまう。ソ連軍にも隠してのことである。物資窮乏の中、全員の協力と工夫で必要なものを作っていく。鈴木少尉は恋愛小説を書き、連続ドラマ代りに朗読する。文学や思想書の読書体験を活かして講話もする。どうやら旧制高校の寮生活体験を活かしたコミューン型集団づくりというところである。

そこへ別の捕虜集団が合流する。こちらは大尉以下軍隊的上下秩序を維持している。収容所の自治会は旧軍隊感覚の勢力と手探りで民主的な秩序を作ろうとしていた勢力の葛藤の場となる。暴力で制圧しようとする者もいる。自分の子分にだけ食糧を特別に分配しようとする者もいる。やがて、不正と暴力の中心人物に対する糾弾闘争が起こる。著者はそれ

を「餓鬼と畜生」の闘いとよぶが、立ち上がった「餓鬼」と自己批判した「畜生」の双方の人間化が共に記録されている。著者はある時点での敵・味方を固定した善玉・悪玉関係に単純化することはしないのである。

帰国が近づいた日、「帰国したら共産党員になる」という著者に対して、グルジーノフは「共産党員になる前に真の民主主義者になってほしい」という。その時は意味が判らなかったが――と著者はいう。

帰国船の船倉で著者はノートにこう書く。「立派な客船で航海を続ける人達は、波の底の世界の美しさと、そこに如何にすばらしい宝の数々が蔵されているかに少しも気付かない。たとえ気付いたとしても、水にぬれるのを恐れて、飛び込んでのぞこうとはしないものだ」と。そして「この言葉は、帰国後の私の生きざまを貫く一つの信条となったのである。」という。

評者は本学助手になって以来、この三十余年の間に著者のシベリア体験を何度かおききした。「グルジーノフのいったことが今になって判る」とも何度もおききした。ラディカルな民主主義者としての鈴木先生から評者が学んで来たことは多いが、そのうちの最大のものは、考えてみれば、「美しい波の底をおそれず、近づこうとする姿勢」であったかと思う。宝を視ようとする姿勢は宝である。著者はさらに若い世代にこの宝を届けようとして、ここまでがんばって来られたし、また本書を書かれた。一人でも多くの人に読んでほしい。

（たなか　よしかず）

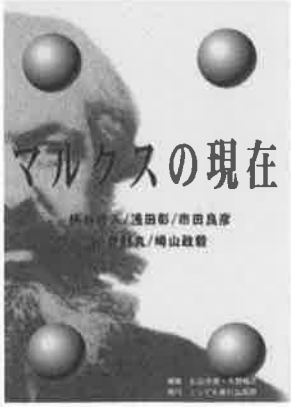
柄谷行人・浅田彰・市田良彦・崎山政毅・小倉利丸著
『マルクスの現在』
（とっても便利出版部、一九九九年。定価一六〇〇円）

植村邦彦
経済学部教員

いまマルクスがブームなんだそうだ。たしかに関大生協書籍部の新刊売場にも、マルクスと名の付いた本がいくつか置いてあるし、十月には、朝日新聞社のアエラムックにまで『マルクスがわかる』が登場した。このブームの火付け役こそ、今年二月に出版された『マルクスの現在』である（と、これは某思想系雑誌の編集長から聞いた話）。

そこで早速読んでみる。この本は、昨年行われた京都大学経済学部新入生歓迎講演会の記録で、浅田彰と市田良彦、小倉利丸と崎山政毅、柄谷行人と浅田彰、の三つの対談からなっている。「新入生のための入門講座」なので「高校程度の知識だけを前提して」話をする、と浅田彰がはじめに言っているけど、マルクスの生涯と思想から始まって現代のマルクス主義の諸潮流にいたるまでの話を、たぶん一時間程度（約三〇頁）でまとめているからすごい。しかし、京大の新入生には本当に理解できたのだろうか。

感想を一言でいうと、まるで一頃のパソコン（やソフト）のマニュアルみたい。パソコンがある程度使えるようになった後でならマニュアルを読んでも理解できるけど、初心者にとっては一つ一つの用語自体が（ドラッグします、とか、インストールします、なんて突然言われても）何のことやらわからない、のである。



というわけで、この本は初心者向けの入門書ではなく、実は中級者向けの解説書である。マルクスやマルクス主義関係の本をもうある程度は読んでいるという人、特に一九六〇年代以降の現代マルクス主義に関心のある人には、面白いと思う。

例えば、第一部「マルクス再入門」では、「結局、廣松哲学というのは、弁証法化された新カント派のようなものだと思います」という浅田彰の廣松渉論を聞くことができるし（廣松派は怒るだろうけど、説得力がある）、他方の市田良彦は、フランスの構造主義的マルクス主義者ルイ・アルチュセールと、イタリアの極左「赤い旅団」事件に関与したとして獄中にあるアントニオ・ネグリ、という二人の思想家の考え方のポイントをわかりやすく説明している。そのうえで、市田は、最後までフランス共産党にとどまったアルチュセールと、党の解消を主張し「アウトノミア（自律）」運動の指導者となったネグリという対照的な二人が、例外状況的な「出来事」の理論化という問題意識と方法としての「スピノザ主義」において完全に交差していることを指摘している。これがぼくにはとても興味深かった。もっとも、浅田はネグリを「滝田修こと竹本信弘」（自衛隊基地襲撃事件を共謀したとして京大経済学部助手を免職になった新左翼運動指導者）のような「楽天的でおっちょこちょい」な人物として、むしろ否定的に見ているようだけど。

「マルクスからネグリへ」と題された第二部のテーマは、ネグリというよりむしろ「マイノリティの運動

マルクス

エンゲルス

の可能性」である。小倉利丸は、ネグリの影響を受けた七〇年代のイタリアや八〇年代のフランスの学生運動が、学生たちの「主体的な自己価値創造」を目指すものであって、運動形態においても理念においても、従来の左翼運動とは違う新しいものであることを指摘している。それを受けて崎山政毅は、メキシコ・チアパス州の先住民によるサパティスタの解放闘争を紹介しながら、そこにおける闘いの実践の仕方と解放の理念そのものが、大衆的な自律性に根ざした、しかも他の人々に開かれたものであり（例えば、彼らはインターネットを使った双方向コミュニケーションを活用している）、その意味でやはり伝統的な民族解放運動とは異なる新しさをもつことを強調している。開かれている、ということは、ぼくたちにとっても他人事ではなく、ぼくたち自身がそこから学べるものがある、ということである。

第三部「マルクスのトランスクリティーク」は、柄谷行人と浅田彰が共同編集している雑誌『批評空間』のいわば出張対談のようなものであり、ここ何年間かカントにはまりこんでいる柄谷によるマルクス読解の試み（『群像』連載中）の自己解説である。これは、マルクスに関してはいろんな読み方があるし、こういう読み方もできます、という一種の裏テクものだと思えばよろしい。ぼくには、対談の後の質疑応答のほうが面白かった。柄谷の人柄と考え方がよくわかる。

ほんとの初心者には、アエラムックの『マルクスがわかる』のほうが本当によくわかる。でも初中級者は、解説書や研究書を読むよりは、やはりマルクスそのものを読んだほうがいい。予備知識なんてなくていいから、自分の眼と感性を信じて読むこと。おすすめは、『経済学・哲学草稿』（岩波文庫）と『共産党宣言』（岩波文庫）、それに『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』（太田出版）。それだけ読んだら、後は『資本論』に進むもよし、リタイアするもよし。中級者以上には、昨年出たエルンスト・ブロッホの『マルクス論』（作品社）がおすすめ。論じる思想家と論じられる思想家との間に火花が散る本。装丁がいい本は内容もいい、という一般法則の見本でもある。

（うえむら　くにひこ）

橋本治著

『貧乏は正しい！』

（小学館文庫、一九九八年。定価四七六円）

若森章孝
経済学部教員

「若い男は本質的に貧乏である」というメッセージを伝えるこの本をいまの「金持ち」の大学生は読んでくれるだろうか、タイトルを見ただけで拒否反応を起こさないだろうか、この本の読書案内をわざわざ書いても意味がないのではないか。そんな思いで読書案内の原稿執筆を締め切り間際まで延ばしているうちに、貧乏と若い男を結びつけるエピソードを耳にすることがたまたまあった。

そのエピソードは、著者の橋本と同じ団塊の世代の友人が話してくれたことである。近く娘が結婚することになった友人は、最初は結婚にはまだ若すぎると感じていたが、奥さんから「わたしは当時大学院生の、お金も研究業績も将来の保証もない、若さだけがとりえのあなたと結婚したのよ」と言われて、娘の結婚を認める気になったと言っていた。友人の奥さんの言葉に感心したり、自分が貧乏であることを自覚している若者がいまどれだけいるかな、と思ったりした。

著者はこの本の中で、「一番重要なことは《若い男は本質的に貧乏である》という事実を自分のものとして受けとめることである」と繰り返し語っている。「若い男＝貧乏という自分の前提」を認めることによって、若者は「強くなれる」し、バブルがはじけた後の就職難とリストラの時代を生き抜くことができる。「若い男＝貧乏」ということは、人類の歴史を貫く「真実」あり、「人類の未来を開くキー」なのである。

しかし、現在の若い男が「自分は貧乏である」と受けとめることはなかなか困難である。たくさんのプラ

ンド品やクルマや携帯電話などもっている現代の若者の多くは、「自分は貧乏じゃないぞ、ということを他人にアピールするための金、つまり、自分は貧乏だということをごまかすための広告費」を無理して使っているからである。若者はこのような広告費の使用を中止することによって初めて、若い男＝貧乏という自分の前提を受けとめることができる。ま

た、親の仕送りに頼って生活している大学生は貧乏ではないかもしれないが、そんな大学生は著者の定義によれば「若い男」とは呼びがたい。親から離れずに、自分は若い男だという顔などできないのである。若い男とは、「貧乏でも自分には力があるから平気だ」という強さをもった存在である。そうだとすれば、実際の若い男が中年または老人であり、実際の中高年が若い男である、ということもたまにはあることになる。

著者は「若い男は本質的に貧乏である」という真理を認めたがらない現代日本の大学生にたいし、いくつかの説得材料を用意している。著者によれば、性的に成熟しているのにパートナーをもっていない若い男は、オナニーに象徴されるような本質的な貧乏を刻印されている。著者のおもしろおかしな点は、このような本質的貧乏を経験した若者とそのような経験を経過することなく性的成熟と同時にパートナーに恵まれた若者とを比較検討し、「貧乏は正しい」という命題から、「切実じゃないくせに、テキトーに気持ちいいことに出会える機会」が若者の成長プロセスを奪ってしまうことを、真剣に議論していることである。

これだけ説得してもまだ「若い男は本質的に貧乏である」という真理が分からないかもしれないこんにちの大学生にたいし、著者は「貧乏とは、それ自体が利益を生み出すような財産を持っていないことである」と説明する。たとえ年収が２０００万円ある人でも、それがすべて労働の代償として会社からもらう給与だったら、金持ちとはいえないのである。金持ちとは、株や土地のような、それ自体が利益を生み出すような財産を持っている人間である。しかし、金持ちにとって大事なのは、それ自

体が利益を生み出すような財産を増やすことだから、金持ちは極端な浪費をしないだろう、と著者は言っている。ただ著者の金持ちの定義はやや常識的に過ぎるように思える。著者らしく、おもしろおかしく真実に触れるような金持ち論の展開を今後に期待したい。

ところで、この本にたいするいちばんの批判者は女性ではないだろうか。フェミニストのみならず、「男は会社、女は家庭」という性別分業論に疑問をもつ女性が、カッカするような文章が意識的に書かれている。例えば、「亭主」という「それ自体で利益を生み出すような財産」を持っている「専業主婦」は、カテゴリーとしては金持ちに属する（二二九ページ）という叙述がある。次のような文章もある。「この本の初めで、《若い男は本質的に貧乏だが、若い女は本質的に貧乏ではない》と言った。それはこういうことねーーつまり、男が女のヒモになるのはそう簡単に出来ることじゃないが、女は当たり前のように専業主婦にはなれる」（二二九ページ）。現代の大学生、とりわけ女子学生はこの文章に怒るだろうか。著者は反撥を百も承知して、なぜこのような挑発的な文章を書いたのだろうか。著者は、若い女が「自分は貧乏である」ことを受けとめる「若い男」になることを期待しているのではないだろうか。

著者は七〇年前後の「大学闘争」のころに東大に在籍していて、「止めてくれるな、おっかさん、背中のいちょうが泣いている」という駒場祭のポスターで一躍注目され、その後作家活動に入った。代表作に、『桃尻娘』や『人工鳥戦記』などがある。それゆえ、本書は、年頃の娘や息子をもつようになった三〇年前の全共闘世代が、バイブルや『資本論』のような共通の必読書がなくなったこんにちの時代の若者に贈るメッセージである。いまの大学生はこの本をどのように読むだろうか。この本にたいする関大生の感想をぜひ聞きたいと思っている（この本の感想をE-mail：wakamori@ipcku.kansai-u.ac.jpに送ってください）。

（わかもり・ふみたか）

連載

日本中国 ことばの来往（ゆきき） その60

「五四」運動、八十年の回顧

芝田 稔

今年は中国にとって建国五十周年という記念すべき年であったが、新中国建設の出発点と見做される「五四」運動の八十周年記念の年でもあった。今日の中国が建国以来数々の思考錯誤を経て近二十年来「改革開放」「中国的社会主義」の道を創造し、国家の「現代化」を目指しているが、この歴史的流れの起源も、中国人にとっては、また「五四」運動まで溯るのである。

日本では高校の歴史教育についていえば、昔も今も古代を重視する余り近現代は青年の頭に残らない。恥ずかしいことであるが、筆者も「五四」運動という中国で起きた愛国運動であり、同時に政治運動でもあり、またさらに新文学、新文化運動にまで発展した珍しい、しかも注目に価する複雑な運動が、つい十数年前に勃発していたことなど知るはずもなかった。一九三四年中国は東北地方に就職し、中国語を学び続け、多少とも小説や有名人の随筆などを読むようになって、初めて「五四」の存在に気付いたのである。しかもこの運動が第一次世界戦争の後始末を巡って、同じ連合軍側に協力していた中国と日本、その考え方の違いから、北京大学を中心に学生群を激昂させたのが、その発端であったことを知って目が覚める思いであった。

「五四」運動はいわば、対外的な圧力をはね返し、国

内的には長い歴史の過程で中国人を縛り付けていた手枷足枷を解くことであった。今その目的は八十年をかけてどこまで達成されたであろうか。

このたびは八十周年を記念する多くの中国知識人のエッセーを読むことができた。ここにそのうちの二篇を選んで要約[1]し紹介することにした。

「五四」に戻り改めて啓蒙

中国の伝統文化は二千二百年前、秦始皇が天下を統一した時以来、一言でこれを云えば、専制主義である。応急処置によって専制主義を救う唯一の活路は、即ち啓蒙である。近三百年来人類歴史の主流であり筋の通った自由主義となって専制主義に取って代わったのである。

中国人はこの長い歴史の過程を通じて、専制主義の弊害に目覚めたことがなかった、とはいえない。王充[2]から李贄、さらに戴震へと断続的にまとまりのない自覚はあったけれども、系統的に自覚運動が始まったのは異文化と大規模に接触してから以後の事である。実に明確に中国の病根を診断したのは厳復[3]であった。一八九五年彼は従来から軽蔑していた国土の小さい日本に敗れ、朝野が一大ショックを受けた時から一つの結論を出した。中国が一八四八年アヘン戦争以来西方国家と交戦する度に敗れた原因は「自由不自由異耳」（自由と不自由の違いによるのみである）と結論したのである。

中国は二千余年来「君君タラズト雖モ、臣臣タラザルベカラズ。父父タラズト雖も、子子タラザルベカラズ。夫夫タラザルト雖モ、婦婦タラザルベカラズ」と、上は朝廷から下は庶民の家庭に至るまで専制主義の雁字がらめの中で奴隷となっていたのである。勿論中国歴史には変動もあったとはいえ、魯迅の言葉を借りれば、実際には中国人は穏健な奴隷でおれるか、そうでない奴隷になるかの時代の何れかを選択する以外なかったのである。何千年という奴隷の生涯は中国人の人間性を無理にねじ曲げ、魯迅の筆になる阿Q[4]を造り上げてしまったのである。

「五四」運動の先賢者たちは、中国が停滞して進歩せず、そのために立ち遅れて戦に敗れ続けた原因が伝統文化の中に「民主」と「科学」がなかったからであることを発見した。中国が立ち上がり先進国に追いつくためには、陳独秀[5]の言を用いれば、それは「徳先生」（民主）と「賽先生」（科学）のお二人に来てもらわねばならなかったことである。

その時から現在まで已に八十年は過ぎた。お二人の先生を中国に招き入れるため、どれほど多くの人びとが、

どれほど尽力したか知れないのである。そのために大衆の前に顔をさらし、熱い血を犠牲にしてまで、近代世界史上稀に見る辛くて苦しい・壮烈な運動を敢行したのであった。だが、その結果、先賢の初志は達成される事なく、孫文の遺言通り：「革命尚未ダ成功セズ、同志ハ依然須ラク努力スベシ」に終ってしまったのである。

この原因は「打倒孔家店」（儒教を指す）」と「全盤西化（全面的西方化）」のスローガンが代表しているように、徹底的な中国伝統文化の打倒、中国伝統文化の破壊を主張し、遂に中国原有の社会秩序を維持できなくしてしまい、その間隙に乗じてフランス革命やロシア革命の思潮を導入した。そして最後には「文化大革命」を惹起（ひき）すことになり、国家と社会を崩壊の瀬戸際まで追いつめ、中国はここ数十年の長きにわたり人類歴史上稀に見る悲劇に見舞われたのである。

これは事実である。だが、この持論には中国伝統文化を余りにも過小評価しているきらいがある。中国の伝統文化はいわゆる「上下五千年、縦横九万里、人口四万万」という中国伝統社会の巨大な体躯の中に存在しているのであって、いわゆる「五四」新文化運動も、ほんの小さな刺激をこの巨大な体躯にぶつけたに過ぎなかったのである。この「垂而不死、腐而不朽」（何時までも死なず、腐っても朽ちない）巨大な体躯には、この種の刺激を包容して、消化し、すりかえ、転化し、更に最も適切で最も立派な形式を練り上げて、中国歴史上に、また人類歴史上に最も強烈、最も暗黒、最も野蛮な専制主義を実現する十分な力量がある。それはただ名称が代わるだけである。――絶え間なく「私心がひらめけば容赦なく闘争する」集団主義なのである。

中国伝統の価値、更には中国の伝統社会には、一部共通認識されているように、堂々とした立派な一面があるし、また特に邪悪・暗黒な別の面もあり、両者が交互にその役割を果たしてきた。歴史の発展を推進したと云っても、実は全て中国歴史を循環往復する停滞の中に陥る惰性の力に過ぎなかったのだ。この両方面に対する歴史と実際は、尚研究不足であり、特に後者については殆ど手がつけられていないのである。

今から二十年前、つまり「五四」運動六十周年に際し中国の一部有識者はいわゆる「封建社会主義」を改めて深く研討しなければならぬと提案したことがある。この論断は世の識者から上層まで当然全く正しいというべきであったが、その後種々の原因によって、このような探求は中断され、この思考に沿って深く掘り下げていくことができなかった。ただこの一、二年の間に曽ての遺著が許可を得て再版できるようになり、改めて研究の糸口を拾い上げて研究に従事する人が現れている。しかしその任務は並大抵ではなく、今始まったばかりであると云わざるを得ないのである。

科学の面でも情況は余り芳しくない。古代中国は科学の面でも世界の先頭に立っていたが、近五百年間に西欧の近代科学発展に比べて大いに立ち遅れた。殊に最近の百余年来中国にうち立てたばかりの一皮の薄い科学思想が、部厚い濃厚な霧に覆われ、疑似科学と反科学思潮が中国で一層猛威を振るい、大流行してしまった。今日の中国は已に十二億の人口を有しているが、根本的に改革するために働いている者は、指で数えることができるほどひと抓みの人にすぎない。任務は重く道は遠い。

現在流行している見解を見ると、一つは中国はとっくの昔に「五四」を超越し、「五四」が追求した当時の民主観を超越してプロレタリア社会主義的民主観を確立しているといい、また「五四」が追求した当時の科学観を超越して弁証唯物主義的科学観をも確立した、とするものである。また別の見解は、世間で問題になっているのだが、「五四」は已に時代遅れである。今後われわれは「五四」を超越して中国伝統の価値を継承し、発揚して、それを世界未来の共通の価値としなければならない、とするものである。この両者はいずれも奇想天外に近いものだと考える。

われわれは「五四」運動が已に夭折したと云いたくはない。「五四」は中国人の現代化を追求することが目標であったことから云えば、われわれは中国のような老大国であったことから云えば、われわれは中国のような老大国において現代化を実現することは、如何に困難なこ

とかを実感せざるを得ない。しかし正に中国人の現代化こそ、新中国によって国家目標の「現代化」の出発点であり最終目的であることを規定されているのである。中国人は須らく卑下と尊大との間に平衡を欠いた阿Qから、自尊自律、独立自由な現代公民に変身しなければならない。八十年来「五四」の先賢者たちが行なおうとしたのは、全人類の共通事業であった。その成功は遅れてもよいが、決して失敗は許されない。中国伝統文化の反撃は、われわれにとっては最良の「反面教師」である。「前事不忘、後事之師」（前の経験を忘れないで、後の教訓とする）この教訓こそ心有る人、志有る人にとって、正に尽きることなき宝蔵である。胡適の言葉をしっかり覚えておこう。

「われわれは国を救わねばならない。必ず思想学問から手をつけるべきであり、如何に遠回りしようとも、そこか逃げることはできない」

われわれは敗れても戦い、ますます頑張って「五四」に回起して新たなる啓蒙に立ち上がろう。（李慎之氏筆談）

また「徳先生」を談じる

世紀の変わり目に際し「五四」運動八十周年を迎えて、また「徳先生」の問題を論じないわけにはいかない。

自由民主は封建主義を墓地に送って資本主義を迎え入れる条件であり、現代化と民主は切っても切れない関係にある。西方各国は数百年来、とっくにこれを実証したが、中国は百年来何回もすれ違ったまま好機を逃がしてきた。

最近友人たちと語らった折り、孫文の「三民主義」に準えていえば、一九四九年に民族主義を解決し、七九年後になって民生主義の希望が持てるようになったが、民権主義の方はどうなっているのか……。

民主の対立相手は専制である。民主と科学は双生児であり、西方資本主義は今日も尚依然として発展を続けているが、その関係は不可分である。マルクスのところから来た社会主義は、元はといえば民主との関係が資本主義のそれよりも更に優れているものだと考えられていた。しかしソ連が七十年にして党も国家も亡くした教訓がある。それは政治上正に民主と反対の個人崇拝、領袖専制、異分子弾圧、官僚特権等の道を歩んだことにある。

われわれは曽て「左」寄りに二十年間、大衆を運動に巻き込み、次に十年の大災害を起こし崩壊の崖縁を歩みつづけた。地獄で仏に出会ったのは七九年後、乱世を治めて正しい世にかえし、鄧小平が改革開放の道をつけた時からである。鄧小平は一九八〇年『党と国家の指導制度の改革』の中で、特に思想政治面では専制主義の残りかすを徹底的に粛正しなければならず、権力の過分集中、個人崇拝、家長制作風、特権振舞、法制破壊等の問題を解決しなければならぬと論じている。周知の如く、それ以後「精神汚染」の徹底除去、「資産階級自由化」反対に関する文章は高閣に束ねられ、しかも胡耀邦の辞職まで引起した。八十年代の新聞雑誌を回顧すると、民主を論じた文章が極めて少なくこれとは逆に「新権威主義」「強人政治」を鼓吹する主張が出現しているのである。

われわれは曽て「造反有理」[6]の年代を通って来た。毛沢東は大々的に造反行動を推進したが、これは民主の原則と違背する。民主は如何なる形式の専制にも反対せねばならず、民主を勝ち取るにも民主の原則に合致しなければならない。民主は自由・平等・人権・法治とは融合一体のものである。憲法に規定されている公民は言論・出版・集会・結社・デモ行進及び宗教等の自由を有しているが、われわれはこれを貫徹しているであろうか。他のことは別として、現在もやはり一律に輿論に傾倒し「文革」時の心傷む歴史を論評することさえ発刊するのが難しい。

一九八九年からまた十年が過ぎた。だが未だに覚えているのは「五四」運動七十周年の時「光明日報」主催の座談会で発言したことであり、その一節をここに述べておこう。

当然のことながら、民主と科学は法治とも切り離せない。われわれは今尚「人治」に慣れ切っており、「法治」には馴染んでいない。指導者は依然として

自分個人の言葉（考え）を相手に押しつけるのが、お気に入りのようです。人びとは法があるのにそれを頼りにせず、法を知っていても法を犯し、法を執行していても法を犯すことまでやる。私が考えるに、われわれのこの幾千年に及ぶ封建伝統と小農経済の国家においては民主・科学と法治を毎日食事をとるのと同様に生活上欠かせないものとするには、尚長い長い道程を経て、恐らく幾代かの人びとが絶え間無く努力を払ってこそ実現できるものと、私は考える。従って民主・科学と法治は、われわれは年々論じ、月々論じ、日々論じるべきである。

もしも私が二〇〇九年まで生きることができたならば、やはり「五四」を記念する文章・現在よりも少しは楽観しているようなもの、を書くであろう。（李鋭氏筆談）

注　①『随筆』誌（広州・発行）の「五四」筆談より李慎之、李鋭両氏の文章を翻訳し、それを要約したものである。（一九九九年第三期　一二二号所載）

②　王充　後漢の思想家。合理主義に立ち漢代に流行した讖諱思想と対決した。

李贄　明末の人で王陽明派の思想家であるが、仏教にも通じ、儒教の道学礼教に反対、四書五経を軽視した。

戴震　清の考証家。四書全庫の編修に携わる。特に説文に通じた。

③　厳復　清末の思想家、翻訳者。英国留学、清北洋海軍学校教授、後京師大学堂（後の北京大学）教授、校長。西方近代思想の名著を系統的に訳し、中国に初めて西方科学・民主を紹介する。新学の先覚者。

④　阿Q　魯迅が一九二一年に発表した小説「阿Q正伝」中の人物。中国伝統社会を代表する阿Qの性格を描き、中国人の国民性の弱点を暴き「反面教師」の資とした。

⑤　陳独秀　東京高師卒。後フランスに遊学、西方の近代思想文化の影響をうける。帰国後革命運動に携わり一九一五年「新青年」雑誌を創刊、その健筆を認められて北京大学文科科長に任ぜられ、以後李大釗、胡適、魯迅、周作人ら新鋭を集めて新文化運動の中心となる。後にマルクス主義に傾倒して大学を退き革命運動に奔走したがトロツキー派として党から除名され、抗日戦中の四二年に病死す。

⑥　造反有理　謀反を起こすには必ずその正しい理がある、反逆するには道理がある、という意味で一九六六年毛沢東が「造反派」の紅衛兵に向

かって述べた政治スローガン。

（しばた　みのる・元文学部教員）

連載

《研究余滴》

フランス詩の歴史（その九）

第四章　十八世紀・啓蒙主義時代

山村嘉己

1

一口に言って《Lumière（リュミエール）》（光明）の時代であるといわれる十八世紀も、やはり時の思想の流れから言えばほとんどまん中で前後に割ることができる。黄金の《古典主義》の光のかげを追いながら、政治体制が絶対専制の色を失って行ったのと併行して、文学の世界でも均衡と中庸が尊ばれた前代に比して、変化と多様性を重んじる傾向が頭を出し始める。その舵をとる理念は理性を核とする哲学Philosophie（フィロソフィ）である。もっとも、この哲学ということばも、今、われわれが使っているような観念的な思弁を指すのではない。前時代の理想的な人物像として考えられていたHonnêto homme（オネットンム）（教養ある紳士）に対し、「哲学者」とは、いわゆる独断的な形而上学を、「体系の精神」として排し、偏見にとらわれず、すべてを自らの眼で批判・検証し、人々の眼を開くことに努めるものなのである。

したがってモンテスキュー Montesquieu（1689～1755）、ヴォルテール Voltaire（1694～1778）、ディドロ Diderot（1713～84）、ルッソー J.J.Rousseau（1712～78）という四人の啓蒙主義者によって、この世紀の思想は概括されるだろうが、この際も、モンテスキューと、

後の三人との間にはかなりの差異が見られ、後の三人の間にも、それぞれ特徴的な姿勢が見とれるのであって、ここに十八世紀の特色もまた浮き上がってくるといえよう。

先ずモンテスキューの『法の精神』（一七四八）は三権分立の理論や絶対専制主義の批判でよく知られているが、実際は、法はそれによって立つ風土、人間の風習などによってさまざまな形態をとることを、いろいろ具体的な実例をあげて説明した、複雑で不統一な短いエッセーの集合というべきものであったが、このすべてを一つの理念で統合しようとしない、現実に基づいた実際性を尊ぶ考え方が前代への大きな批判となったのであった。かれの小説『ペルシャ人の手紙』（一七二一）もまた、パリに遊学したペルシャ人ユスベックとリカの二人が故郷と連絡をとる往復書簡の形式によって当時の世相、風俗を自由に描写し、批判したものであった。

モンテスキュー

ヴォルテール

また、ヴォルテールも貴族ながら、リベルタン（自由思想家）として、王政を諷刺し、投獄されたりしているが、その批判的精神を「イギリス通信」ともいわれる『哲学書簡』（一七三四）で十分に発揮している。当時の先進国イギリスをお手本として、フランスの制度社会を縦横に諷刺したもので、その余りの評判についに発売禁止を受けたほどであった。さらにかれの『ルイ十四世時代史』（五一～五六）は壮大な歴史作品であるが、先立つルイ十四世の黄金の治政を十分に認めながら、その欠点も余すことなく指摘する快著といえる。その他、小説『カンディド』（五九）は、ライプニッツの楽天主義を信じ、この世のすべてはよしとする純心な青年カンディドが、恋人キュネゴンドとともに世界を巡り、辛苦の果て結局は「自分の畑を耕さねばならぬ」と悟るまでを明快な散文で表現して小説の進展に力を貸すなど、十八世紀の思想家と

して幅広い活躍を示している。もっとも、このかれにしても、詩においては、若いとき『アンリアッド』（二八）によって好評を得たのみに終っている。

つづいてディドロであるが、堅実な小市民階級の出身者であるかれはより実際的な知識の充実を狙い、『大百科全書』（Encyclopédie（アンシクロペディ）（五一～七二）を編集した。当時、イギリスではチェンバーズの百科全書がすでに出版されていて、最初はその翻訳を企てたものの、多くの協力者を得て自力で集成することができたのであった。ここにはすでに述べた四人の他に、ダランベールD. Alembert コンディアック Condillac コンドルセ Condorcet など当代の代表的な学者、思想家、文学者が顔を並べ、重要な新知識が十分に開陳されている。

ディドロ

この他、かれには唯物論への扉となった『見えない人々のための盲人についての書簡』（四九）や、主題を日常的な一般市民の生活からとることを主張した『演劇論』（五八）、後にスタンダールやボードレールらに大きな影響を与えた『美術論』（サロン）（五九～八一）らの多くの理論書を公にするとともに、小説においても『運命論者ジャックとその主人』（七二～七四）『ラモーの甥』（六一～七六）らの近代レアリスムへつながる住篇をものにしている。

これら三人によって十八世紀の啓蒙思想の骨格はほぼ構築され、フランス大革命の基礎は固まったのであるが、この思想の仕上げをなしとげ、革命への直接の導火線となったのは、J・J・ルソーに他ならない。かれはジュネーブ共和国で、フランス系の新教徒の貧しい家に生まれたが、父は時計工でルソーの誕生とともに亡くなった

ルソー

母の代わりに一人でかれを育てたと言われる。この父の些か変った性質がかれの空想癖をひろげたと考えられるが、十六歳の時から放浪の旅に出て、スイス、アルプスの山野を自由に馳け巡ったことがルソーの感受性を豊かに成長させることとなった。しかし、出奔後間もなく知ったサヴォアのヴァランス夫人の厚い庇護を受け、後にかの女の恋人ともなって、そこで学んだ諸々の知識が、かれを当代でも有数の思想家に仕上げたことは無視できない。これらの知識と感性を、ルソーはアカデミーの懸賞論文である『学問芸術論』（五〇）と『人間不平等起源論』（五五）に十分に展開し、当時の論壇にひろく認められたが、これらの論のなかで、かれは学問が必ずしも人間に幸福をもたらすものではなく、牧歌的な自然の状態が真の自由人を作ることをつよく主張している。さらにこの考えを進めて『社会契約論』（六二）、『エミール』（六二）を表わすが、前者の冒頭の「人は自由なものとして生まれている。しかもいたる処で鉄鎖につながれている」や、同じく後者の冒頭の「造物主の手を離れる時、すべてが善で、人間の手に渡るとすべてが悪となる」ということばによってもよく分かるように、本来善である人間をゆがめるものは国家制度や教育・文化であるとする思い切った論点は、たしかに清新なものであっただけに当時の人々をつよく驚かせ、ヴォルテール、ディドロたちとも数々の対立を示したが、それだけに革命の直接的な導火線となりえたことも肯けるといわねばなるまい。

一方、文学的感性を示すものとしては、アルプスの美を広く人々に示した『新エロイーズ』（六一）があり、美しい自然風景のなかに展開される若い二人の、形式にこだわらぬ愛の真情の吐露は大きな反響を呼び、後の『孤独な散索者の夢想』（八二）とともに真の詩的な感動を呼ぶすばらしい才能を十分に示している。さらに、七〇年に完成した『告白』は結局アウトローとして十八世紀

薬草園でのルソー

の社会を生きざるを得なかったルソーの真の姿をわれわれに示すとともに、自伝という新しいジャンルを近代文学のために開示した絶好の人間記録となっている。

2

以上でごく大ざっぱに十八世紀の思想について、四人の啓蒙主義者たちの仕事を中心にして概括してきたが、これほど多くの近代思想の芽生えを胚胎している重要な時代が、われわれの主題である詩の世界にはほとんど何物も残していないという苦い事実にわれわれは気づかざるを得ない。

「一国の文学史と詩の歴史との間には、しばしば絶対的な対立を確認しなければならぬということを、十八世紀の例が異論なく証明している。」（クセージュ『フランス詩の歩み』ルネ・ラルー、小松・武者小路訳）

「小説と随筆を研究する人にとっては、モンテスキューとヴォルテール、ルソーとディドロ、マリヴォーとラクロの世紀は、おそらくミシュレが断定したように大世紀であろう」。と断りながら、ラルーは「詩の方は貧窮に悩んだ」と断定している。

一方、同じように手軽にフランス詩の歴史を紹介している『フランス詩の歴史』（クセージュ叢書）において、J・ルースロもまた「「啓蒙」の世紀、「新しい思想」の世紀でもあれば、また同時に不安の世紀、最悪の社会的かつ哲学的矛盾の世紀でもある十八世紀は、第一級の散文家には恵まれている反面、時代を飾るにふさわしい詩人をもたない」と述べ、それでも、ジャン＝バチスト・ルソー Jean=Baptist Rousseau (1671-1741)、ルイ・ラシーヌ Louis Racine (1692-1763)、ルイ・ランベール Saint Lambert (1716-1803)、ジャック・ドリール Jacque Derille (1738-1811)、エヴァリスト・バルニー Evariste Barny (1753-1814)などの名前を挙げて、詩の流れが根絶やしになっているのではないことを証明しようとしている。たとえばドリールのつぎのような一句を提示しながら。

おいで　私はお前に身を任そう　優しい憂想よ……
おいで　思わしげな眼差し　おだやかな額　そして
両の眼は甘い涙に今にも濡れそうにして。

しかしながら、十八世紀も最後になって、これら凡百の詩人の上に一人の偉大な詩人を生み出すこととなる。

不幸にして若い生命を断頭台（ギロチン）の上に散らせたアンドレ・シェニエ André Chénier (1762-94) である。

シェニエは外交官の子としてギリシャのコンスタンチノープルに生まれている。幼くして母とパリに住み勉学を始めるが、このギリシャ人の母はパリでもギリシャ風の衣装を身につけ、かれにギリシャへの憧れを植えつけた。また、かの女が詩人や芸術家と多く交際したことで、シェニエは早くから文学に興味を持ち、詩を書き始めている。学業を終えると軍人になったが、自らその仕事に向いていないことを知り、その後はスイス、イタリヤなどを自由に旅行した。八八年、フランス大使の秘書としてロンドンに滞在するが、大革命とともに秘書もやめて帰国、九一年には革命に参加するが、ジャコバン党の方針に反対し、国王擁護の筆を取ったため、ついに捕えられて、ギロチンにかけられてしまう。

シェニエ

このような事情もあって、かれの詩はすぐにはまとまって出版されることもなく、制作年代もなかなか確定できないが、七八年頃までに書かれたものとして「エレジー」や「牧歌」など倦怠と不安にみちた抒情的なものがあり、ロンドン滞在以後は長篇を志した「創意」、「エルメス」「アメリカ」などの断片が見られる。さらに逃亡、投獄という厳しい体験のなかで書かれた「牧歌」「ジュー・ド・ポーム」「諷刺詩」などのなかに、革命に対する情熱を歌った名篇が数多く見られる。つぎに一つの例を挙げておこう。

涙せよ　心優しい海鳥　アルキオンたちよ　聖なる鳥たちよ
海神テチスに親しい鳥たち　心優しい海鳥たちよ
涙せよ
年若いタレントの乙女ミルト、かの女は生きていた。
船は　かの女を　シチリヤのカマリーヌの岸へと運んでいた。
そこでは婚姻の式、歌と笛とがゆっくりと
かの女を許婚者（いいなづけ）のもとへと導くはずだったのだ。
この日を待ちかねて杉の木箱に鍵もしっかりと
結婚衣装と祭にかの女の腕を飾るべき黄金と

ブロンドの髪を香らせる香水とが収められていた。
しかし　舵の上にひとり立ち星を祈るかの女に向かい
容赦ない風がさっと一吹き　ヴェールを飛ばし
かの女を襲う。驚愕し　水夫たちの姿も遠く
かの女は叫び、倒れ、波間に空しく身を散らす
波間に空しく身を散らすああ年若いタレントの乙女よ
その美わしい身体は波にさらわれ流れて行った。
海神テチスは溢れる涙を押さえ　貪り寄る怪物たちに
かばおうと
とある岩の窪みに　その身体を安置する。
やがて　かれの命を受け　美わしの海の妖精たち集い
その身体を濡れそぼつ岩より高く捧げ
岸辺へと運び、そして　ゼフィルの岬の
あの記念碑にしづしづと祭り上げたのだった。
それから遠くの方より　大声でお互い友を呼びながら
森の泉の　そして山々のニンフたち、相集い
かの女らすべて胸を叩き、長い喪服をなびかせて
その柩をとり囲み『悲しや悲しや』と繰り返し哭いた。
ああ悲しや　君は恋人の手に戻されることはないのか
黄金の輪が君の腕に結ばれることは決してないのか
甘い香水が君の髪の毛を伝わり流れることはないのか
（「年若いタレントの乙女」（牧歌より））

このシェニエの情熱は、次の十九世紀はじめのロマン主義を十分に予告している。われわれは次の章に大きな期待を抱きながら、ここで粗い十八世紀の素描の筆を擱くことにしよう。

（やまむら　よしみ・文学部教員）

連載

おいてけぼり

――宮本輝試論 X――

芝田啓治

十四、〝おいてけぼり〟――やはり、愛――

(1) 宮澤賢治の場合

古今東西、老弱男女「愛」という概念を規定すれば、正に千差万別と言えよう。人それぞれの「愛」の形があり、方法があるのかも知れない。そして、その共通項を求めることなど不可能であろうし、又、大きな意味を持つものとも思われない。しかし、人は「愛」の根源について思索し、行動し、悩むものであり、誰しも避けて通ることの出来ないテーマとも言えよう。

今、ここでは、それぞれの「愛」の形を追い求めることは避け、普遍的な「愛」とは何かという一点に絞って、それぞれの作家の挑み方について追ってみたい。

一九四〇年代前半、オランダに於いてミープ＝ギースは、アンネ＝フランクたち八名のユダヤ人に隠れ家を提供した。ナチスに見つかればユダヤ人同様の目に合うことを百も承知の上で支援したのである。その後、彼女が次のように語った。

「人間として当然のことで、取り立てて言うべきものじゃありません。だって、昨日まで同じ事務所で働いていた親しい隣人なんですものね。その人たちは、ユダヤ人ということだけで、何一つ悪事をはたらいていないこ

とは、わたしたちだれよりもよく知っていましたから」

正しく、聖書に言うところの「隣人愛」の実践なのである。

「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」（ルカによる福音書一〇章二七節）

「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」（ヨハネによる福音書一五章一三節）

又、マザーテレサの言葉の中に次のようなものがある。「痛みを感じるまで愛しなさい」と。隣人のために、時には自己を犠牲にしてまでも実践するということである。

隣人とは、民族や国境、文化や宗教の違いを越えて広くこの世に生を受けている全ての人ということになる。

「愛も思いやりも、ボランティアも、一方的にこちらの勝手でやることではないか。そう覚悟したときに、なにかが生まれる。」（五木寛之「大河の一滴」）

戦後、日本では「自己愛」や「自家愛」なるものが花盛りであり、その行き詰まりが現代社会の様々な歪みとして表面化してきている。政治に、社会に、教育にと枚挙に遑がない。この愚行を何処かで終わらせ、次へのステップを歩み始めなければならないところまで追い込まれているのではあるまいか。

今、宮澤賢治について、このテーマで追うことにする。

賢治自身、盛岡高等農林学校へ通っている頃、青春時代のほろ苦い経験をしている。

「ひたすらに　をみなを得んとつとむるは　まことのつよき　をのこのわざか」の文がみえるのも、この時期の淡い青春を表したものと思われる。しかし、その彼が淡い恋愛の感情を抑えてでも歩もうとしたのは、彼の進路が余りにも困難で険しいものであったか、もしくは、父を乗り越えることに彼のエネルギーの大半を注ぎ込まねばならなかったからではないだろうか。

「火のごとく　きみをおもへど　わが父に　そむきかねたり」

当時の賢治にとっては、家の問題、家業の問題、そして、宗教上の問題と難問が目白押しで、自ら全身全霊でぶつかっていくしか術はなかった。

盛岡中学校卒業後、彼は進路について悩み、心身ともに病み一年を棒に振っている。その状況を父も憂え、漸く賢治の進路に許しを与えたのであった。賢治は水を得た魚のように能力を発揮し、翌年四月盛岡高等農林学校へ首席で入学を果たし、以後三年間それを通したことに彼の心意気が伺えよう。悩んで思いどおりにいかなかった中学時代とは、生まれ変わったように勉学に邁進する

のであった。自らのために、自らの進路のために勉学するということは、彼にとっては楽しみ以外のなにものでもなく、将来のためただひたすら貪欲に学ぶのであった。

しかし、まだ解決出来ていない大きな問題があった。それは、宗教上の問題であり、又しても父という壁であった。父は、熱心な浄土真宗の信者であったが、賢治は島地大等編の「漢和対照妙法蓮華経」を読んで感動し、一気に法華経の魅力の虜になっている。そして、その生き方は一生変わることがなかった。彼の臨終に際しても父に「国訳妙法蓮華経」を千部印刷し、友人知己に配布するよう頼んでいるところをみても、そのことが伺えよう。

盛岡高等農林学校を卒業する年にも、再び、父と家業継承問題で対立しており、事ある毎に父子は争い、溝を深めていく。遂に、父に改宗を迫り、受け入れられないと知るや家出同然で東京の日蓮主義信仰団体国柱会へ飛び込んだりと。そのような彼の苦悩を理解し得たのは、唯一人、それは妹トシではなかったか。

賢治は二十五歳になって初めて職業に就き、郡立稗貫農学校教諭として教壇に立つ。精神的にも安定し、創作活動に、教育活動に、信仰にと全力投球を果たしている。しかし、その翌年妹トシが死去し、最大の〝おいてけぼり〟を喰ってしまうのである。妹の死により、賢治が愛情を注ぐ対象がなくなってしまい、結果として彼の愛情の表現は全宇宙へと広がりをみせるのであった。勿論、両者への愛情は今までも互いに交錯しつつ、歩んできたことは確かであるが、妹の死は当時の彼の最大の悲しみであり、苦痛でもあった。それは、彼の詩「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」によく表れており、心から身体から悲しみが吹き出し、痛みが文字となって駆けめぐっていくのであった。

「わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき
おまへはじぶんにさだめられたみちを
ひとりさびしく往かうとするか」
（宮澤賢治「無声慟哭」）

「ああとし子
死ぬといふいまごろになって
わたしをいつしやうあかるくするために
こんなさっぱりした雪のひとわんを
おまえはわたしにたのんだのだ
ありがたうわたしのけなげないもうとよ
わたしもまっすぐにすすんでいくから」
（同「永訣の朝」）

妹の死により賢治を襲った〝おいてけぼり〟は、大きな喪失感として、彼の心に空洞を作ってしまった。これを埋め尽くすということは、果して可能なのであろうか。そして、賢治が行き着いた結論は次の文に表れている。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」（同「農民芸術概論綱要」）

単なる観念ではなく、彼の実践の拠り所とし、法華経によってそれを支え、大乗仏教の理想である「菩薩行」を実践しようとするのであった。自らを殺し、他を愛するという「利他愛」「利他行」の世界で自ら生きようと考えるのである。そして、この考え方は、彼の生き方や作品の中で我々は見ることができる。賢治の作品「よだかの星」には、そのような生き方が如実に語られている。

「ああ、かぶと虫や、たくさんの羽虫が、毎晩ぼくにころされる。そしてそのただ一つのぼくがこんどはたかにころされる。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。ぼくはもう虫をたべないで飢えて死のう」

このような弱肉強食の世界、正しく修羅の世界を生きねばならぬ時、賢治は迷わず、自らの死を選択するのである。自己を殺すことにより、「利他行」を実践することによってのみ仏の世界に近づけるのだと考えていた。凶作を救うために自らの生命を犠牲にするグスコーブドリの生き方に、溺れるザネリを助けるために死んでいっ

たカムパネルラにも、この生き方は共通するのである。しかし、それらの生き方が、これ程までに美しく、哀しいのは何故だろうか。

「唾し、はぎしりゆききする
おれはひとりの修羅なのだ」　（同「春と修羅」）

これが、宮澤賢治の生の世界なのではないだろうか。更に、彼は作品での表現のみならず、実生活に於いてもこれを実践しようと試みた。

全宇宙、すなわち、動物も植物も鉱物も、自然の山川に至るまでも、人間と同じ永遠の生命を持っているのだと考え、人間と同等の価値を認め、実行するのである。そして、徹底して東北農民の立場に立ち、菜食主義を実践し、自らの身体を擦り減らして「利他行」「利他愛」を実践するのであった。

彼が、安定した四年四ヵ月の教員生活に終止符を打ち、羅須地人協会を作り、自ら農作業と肥料研究に入ったのも、その実践の一つといえよう。

救われようのない修羅の中を、一人生きる賢治が、辛うじてバランスを保ちうるのは、春なのではないだろうか。東北の春。雪を溶かして、訪れる暖かい春。そして生き物が一斉に芽吹き、新しい生命を得るのである。傷つき、倒れかかっていても、その頭を少し持ち上げてくれるのが春という自然なのであり、賢治自身も救われるのであった。

春に救われる修羅なのである。

そして、賢治は、心を身体を擦り減らして自らの目標へと近づくのである。「愛の世界」「慈愛の世界」そして「仏の世界」へと。

しかし、賢治の得た法華経は、日蓮の排他的な法華経至上主義とはかなり異なっている。日蓮は「念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊・天台過時」と徹底した他宗派批判と唱題と折伏とを実践するが、賢治のそれは他へ

向かうベクトルよりも、自己に向かうベクトルの方がどうも強く感じられる。そして、それが「雨ニモマケズ」の骨格となっているのである。

「ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ」

東北農民に対する単なる応援歌ではなく、賢治自身もその一員として生き、そして働きたかったのである。観念の世界ではなく、厳しい現実の世界を農民と共に生き抜いていきたいと願い、かつ実践するのである。しかし彼の行為は農民に理解されず、認められなくとも、真剣に「春と修羅」の両方の世界を生きようと試みるのであった。そして、彼の愛、すなわち「慈悲の心」は、「よだかの星」の如く、大空高く飛翔し、天空を舞い、死んでいくのであった。

哀しいけれども、それが宮澤賢治の生き方であり、愛の表現といえよう。

（しばた　けいじ・本学経済学部卒業生）

連載

「知的大衆」たる在日朝鮮人二世のつぶやき

玄　善允

(1)　――「在日小説」なるものについて――

関川夏央という人がいる。相当に目が利く物書きと目されているらしく、今や大新聞の書評委員をしている。そのうえこの人、相当の韓国朝鮮通である。

ところでその朝鮮韓国通も、顔触れと様相を一変。現地を知らないままに「理論」と「政治的偏見」から導き出された「理想郷と地獄」といったマニ教的な図柄を描き出しては垂れ流す朝鮮通の時代はほぼ終わった。今や現場を歩き、風や臭いを肌で知り、言葉も操れる人々が物書きや学者の世界に続出している。前者の歴史的的罪責感と心情左翼的理想主義に対するに、こちらは現実主義を標傍する。その筆は自由かったつ、韓国朝鮮通のニューウエーヴの時代なのである。その波頭で軽やかなフットワークと筆を駆使しているのが関川である。彼の『ソウルの練習問題』、『海峡を越えたホームラン』、『退屈な迷宮』などは、朝鮮半島や在日朝鮮人問題に興味を抱く人々には欠かせない書物と言ってよかろう。現に多くの読者を勝ち得ている模様で、その全てが文庫におさめられている。

さてそのジャーナリストあるいはエッセイストあるいは批評家関川が、彼のはじめての小説集の後書きに「日

本人が書いた在日小説」というタイトルを掲げて次のように書いている。

少し長くなるが引いてみる。

……近代化の必然として出現した近代文芸が、やがてこれも一種の必然として生み落とした文芸至上主義を、そしてその影響をもっとも濃厚に受けた気配のある「在日文学」を揶揄してみたいという気分もわずかながらあった。

この本の短編群にはみな在日コリアンが登場するのだが…私がのぞいて見たことのある在日コリアンの書いた「在日文学」中に登場するような人物にはほとんど出会わなかった。「在日」をすくいあげず「在日」を描かない「在日文学」とはなんだろうと、私は長い間いぶかしく思っていた。

一般の在日コリアンは「在日文学」を読まないという事実も知った。極言すれば、「在日文学」は日本人向け、または「文壇」という小さな市場向けの産品なのである。

また自己の置かれた個別の環境と事情には異常なまでに詳細なのに、他の在日コリアンと日本社会の関係のありかたには必ずしも目配りがおよばなかった。つまり日本を憎みつつ、日本近代文学の伝統、なかんずく私小説の伝統には忠実なのである。そして、かつて「帰国運動」を推進したマルクス主義の観念と民族主義の空気に敏感に反応した「在日文学」は、八十年代以後は「アイデンティテイ」という、やはり流行の観念に過剰にもたれかかるあまり、たとえば李良枝の『由熙』のような、出口のない、うつろとしか思えない努力の告白といった、ただただいたましい読後感のみをもたらす表現を行うに至ったのである。

わたしは関川の愛読者とはいかないが、よく読んでいる読者のはずである。少なくとも文庫化されたものはおおむね目を通している。例えば『知的大衆諸君』などは、漫画に対するひいきの引き倒しの感もなくはないが、漫画の実際を知らないままに軽蔑することが知識人の標識とでも言わんばかりの「知的大衆」に対する挑発的な筆致の効き目は相当のもの。知識人などと自称するわけにはいかないわたしなのだが、思わず被虐的な喜びを覚えたくらいなのだから、「知的大衆」の一員の資格くらいは充分にありそうだ。

そうなのだ、わたしは関川の文章には多いに啓発されてきたといってよい。ところが、である。その一方で、痒いのだがどこを掻いていいのか分からぬ違和感も拭え

ず、困惑してきたというのが正直なところ。淀みを知らない筆の運びに、その困惑を忘れることもあるのだけれど、ふとした拍子にその痒みがぶりかえす。そしてその度に、その痒みの在りかと正体が何かを考えずにはおれなくなるといった按配だった。とりわけ一連の韓国朝鮮物にはその感が強かった。しかも、翻って考えてみると、その種の困惑はひとり関川のみならず、先に韓国通のニューウエーヴと呼んだ人々（例えばわたしが割合とよく読んでいる人としては文芸評論家にして大学教授川村湊などを挙げねばならないのだが）の朝鮮韓国物に対するもどかしさにも通底しているような感触だけはあった。ところが、この関川の短文に遭遇したとき、これを糸口にしてここ数年の慢性的「痒さ」の源をつきとめられるかも、という気がしたのである。そんなわけだから、以下のつぶやきは体裁としては関川批判のような形をとってしまいそうだが、そこに主眼があるわけではない。

同じコトバを用いているはずなのに、日本人とわたしの間に薄いけれどもどうにも乗り越えられない障壁があるような気がしてじれったい思いをすることがあったし、今なおある。その見えない壁がどのようにしてそびえ、その壁の材質は一体何か。

若い時にはそれを突き止められた気がしたこともあった。興奮の極みには、壁を崩せるような気になったこともあったと、気恥ずかしいことだけれど、告白しなければならない。根源には歴史があり、政治を変えることで、まっとうな歴史の復元が果たせるのだ、といったよくある若気の至りというやつである。しかし、今この年になってみると、そういう因果のつけ方が肌になじまなくなっている。これもまた成熟を気取った例のお決まりのパターンとあいなってしまうのは情けないことなのだが。

だから、おずおずながら、改めて考えようと思い立ったのである。在日朝鮮人たるわたしの「僻み」にその源があるのかもしれない。あるいは、日本人の側の無知と誤解というお決まりの護符を持ち出して、日本の歴史と社会に責任を被せておしまいとなるのかも知れない。或いは、二進も三進もいかず、そのあげくに妥協の産物というわけで、喧嘩両成敗といったところでお茶を濁すことになるかもしれない。さらにはまた、人間一般の意思疎通の困難といった具合に、話を大きくして分かったふりをするかも。こんな具合で結末の予測はつかないけれども、なんとかやってみようと思う。「ぼやき」もしっかりとした聞き手を想定しその聞き手の存在を忘れなければ、意外な真実に触れることがあるかもしれない。

コトバに対する違和感を手がかりに、壁をつぶすとま

ではいかなくともせめてそれを透明なものに変えることができはしまいか、これが以下の作文の動機であり、目的ということになる。

ところで、もう既にその兆候が明らかなように、奥歯にものの挟まったような物言いが続くことになりそうである。どうにも腑に落ちないコトバどもを前にして、その責任を相手の無理解、悪意などにおっかぶせて正義を気取る年でもないし、またそういうものが通用するような時代でもない。なのに気がつくと、そういう穴にはまり込んで身動き取れないのに、人を断罪する言葉だけは空虚に飛び跳ねる、てなことになってしまう。そういう反復されてきた袋小路に入り込むことだけはなんとしても避けたいと思う。そんなわけだから、わたしの繰り言めいた「つぶやき」ないし「どもり」は、わたしなりの苦肉の策、偉そうぶって言うなら「方法」のつもりなのである。

先ずは何よりも個々の言葉である。わたしにすればどうにも腑におちない「在日」なり「在日小説」なる名称、それをどのように了解しうるかを最初のとっかかりにする。些細な語句の詮索になりそうだし、なにしろ関川文は短文という制約もあってのことか、根拠が明示されることなく断定が積み重ねられているので、いきおいこちらも想像力を巡らして対処しなければならない。書くほうがその厄介さに手を焼いているのだから読者には我慢の限界を越えた駄弁になるかもしれない。多いに恐縮なのだが、我慢しておつきあいのほどを予めお願いしておきたい。

さて先に引用した関川文に入る。

文面を読むかぎりでは、「在日」とは「在日朝鮮人」のことで、その文学つまり一般には「在日朝鮮人文学」（ないしは「在日韓国人文学」）と呼び慣らわされているものが「在日文学」とされ、関川が標傍する「在日小説」と区別されている。

こういう言い換えを単純な省略語法と看做すわけにはいかない。

言葉は選択を不可避とし、その選択は排除を内包している、という一般論をここで想い起こしてみる。「在日」なり「在日コリアン」は「朝鮮」なり「韓国」なり「朝鮮人」なり「韓国人」を排除している。その理由は何なのだろう。

一つの民族で二つの政権が正統性を競って相対立している。そういう実在の国家名を踏襲すれば、どちらかの国家に正統性を認める政治的選択と誤解されかねない。だからそうした曲解を封じたいということがあったので

はなかろうか、とひとまず見当をつけてみる。というのも、そういう配慮はわたしたち在日朝鮮人なり、朝鮮問題に関心を持つ日本人の多くに共有される面倒だからだ。その昔、NHKが「朝鮮語講座」を開講するにあたって困り果てたあげく「ハングル講座」を採用して事をおさめたことを思い返すまでもなく、文章やイヴェント名では両国の名前を並記したり、「在日」だけで済ます例が激増しているし、日本人ばかりか当の在日朝鮮人二世三世が「在日コリアン」とか「在日」を自称するのが目立つほどなのである。だから、そういう意味でなら関川に特異なところはないと言って済ませるかもしれない。

ところが、それだけで説明がついたような気がしない。

というのも、政治的な是非や好悪というレベルでなら、関川の重心は南にかかっている、と関川の読者であるわたしは思うからだ。彼の韓国のフィールドワークの報告書とでも言うべき数冊の書物では、粘り強いフットワークを軽やかにさばく手慣れた文章によって、その地に生きている人々の一筋縄ではいかない生き様が彷彿と現われ出る。程よい感傷と冷静な眼差しが交差するところに、かの地の人間たちへの共感がにじみ出る。それはもとより国家とか政治体制の優劣を対象にした書き物ではない。政治体制に対する言及は注意深く回避されている。しかし、それらを他方北朝鮮のフィールドワークである『退屈な迷宮』と比較してみれば、彼のスタンスは一目瞭然である。人々との触れあいを許さず専ら嘘と教条で塗りたくられた社会とそれを補完するイデオロギーに対する嫌悪と怒りは、先の共感と対称的である。『退屈な迷宮』は「北朝鮮」に対する紛れもない断罪の書なのである。

だから改めて問うてみたくなる。国家名ないしは民族名を忌避した理由は何か、と。

結論的に言えば、「民族的出自」や実在の国家と切り離して「在日コリアン」ないしは「在日」というカテゴリーを立てる、これが第一段階。そしてさらには、そういうカテゴリー自体の虚構性を明らかにしてそれを無化するという第二段階がありそうなのだが、そのあたりの詳細は今ここでは差し控えておきたい。先走りの危惧もあるし、おいしいものは後に取っておきたいという「やしんぼ」の性癖のせいでもある。だが、わたしのつぶやきは最終的にはそのあたりまでを射程にしているなどとどさくさまぎれに見栄を切っておいて、急いで本筋に戻ったほうがよさそうだ。改めて個々の措辞にこだわることにする。

さて、関川は小説と文学という言葉にも厳重な使い分けを施している。何をつまらぬことを、と感じる向きも

あるかも知れないが、そこにもどうやら何か意識的な弁別が働いているらしいのである。先の引用文を参照していただきたい。

「文学」が現実と切り結ばない観念的な産物であるのに対して、関川が目指しているだけでなく現に書いているような、「現実」を掬い上げた作品を「小説」と命名しているらしいのである。こういう風変わりな区分けは関川の物書きとしての来歴や、日本近代文学の「正統」に対する反発などに根差していると目星をつけられそうな気もするが、実のところよくは分からないのである。だが、観念と現実という二項対立の図式が至るところに張り巡らされており、どういう根拠でなのか定かではないが、関川は自らが現実の方に身を置いているという揺るぎない自信を持っていることだけは確かなようである。

ともかく、何故に「在日小説」を書いたのかという小説執筆の動機を糸口にして、「在日文学」にたいする殆ど全面的な否定というのが、この後書きの要約ということになりそうである。

これは珍しいことだ。肯定的な議論はほんの一部で声高くなされることがあっても、否定的論評はあまり見かけなかったような気がする。だからといって、在日朝鮮人文学なるものが高い評価を受けてきたということでは

ない。敬して遠ざけるといえば聞こえはいいが、実は冷ややかな軽視といった風潮があったような印象がわたしにはある。そしてそういう文壇的あるいは知識人界の風潮は日本の「健全な」サイレントマジリティの賢明な挙動と別者ではなさそうだ。まともに応対しようとして少しばかり本音を出そうものなら、いきなり無理難題をふっかけて噛みついてくる乱暴者、そんなものは相手にしないに限るといったところなのであろう。日本的「君子の知恵」とでも言えばよいのだろうが。

もっとも、わたしは在日朝鮮人文学が不当に冷遇されてきたと言いたいのではない。誰の責任かなどと犯人探しをする気など毛頭ないけれど、議論がオープンに関わされたことがなかったし、そうなる事情があったのでは、というわたしの心象を述べたまでである。

だからこそ、関川の全面否定の論調は相当に腰を据えて発せられたという印象が強い。いわばタブーを打ち破る使命感のようなものが文の運びを衝き動かしている。だからこの短文は関川の「在日論」のマニフェストと言ってよかろう。

さて、またしても繰り返しになるが、そうした関川の議論の展開の随所でわたしはつまずく。例えば引用の最初のパラグラフの真意がよく分からないのである。いわく、(日本)の近代化の必然として(日本的)「近代文芸」がやはりこれも一種の必然として生みだした日本的文芸至上主義の影響を最も濃厚に受けた気配のある「在日文芸」を……

いかなる国、いかなる社会の文学であれ、その国や社会の歴史と関係を持たないはずがない。それはたしかに必然であるだろう。しかし、その関係の様態には様々なタイプがあるはずだ。そればかりか、殆ど偶然としか思えない様々な因果の束、そこにあったであろうささやかではあってもそれなりに身を賭した個々の跳躍や自由を想像すれば、必然と言ってしまうと嘘ばかりか大きな罪を犯したような気分に襲われる。だから大学生あたりが分かった口ぶりでそう言うのは笑って許せるとしても、自分がそうするにはためらいがつきまとうような年齢になってしまった。そういうわたしのような人間からすれば、この執拗な同語反復の背後には関川の強い価値判断のにおいを嗅ぎつけるのだが、その実体がよくは分からないのである。

ついでに揚げ足取りの誹りを覚悟の上で、もう少し関川の文章にこだわってみる。

「必然」なる関係づけの言葉によって結ばれた近代化と近代文芸と文芸至上主義が、在日文芸との連結におい

ては「受けた」と言い換えられているのだが、この「受けた」はなかなかに意味深である。「受ける」側の主体的選択とも読めるし、あるいは逆に字義どおり受動的連結と解釈もできるのだが、実はその両方の意味がこめられていそうな気がする。強いものに喜々として自ら身を任せる被虐趣味を衝いているといった気配がある。穿ちすぎの懸念がなくもないが、関川文の「在日」なるものに対する「揶揄」の基調をしっかり受け止めて読めば、そのような解釈も充分に可能な気がする。

さらに言えば、その「受けた」の前には、「最も濃厚に」という最上級が付加されている。これもわたしには奇異に見える。比較級や最上級というものはたとえ文面には現われなくても、比較の対象があるはずなのだが、それが見当たらないし、想像すらつかないのである。

日本語で書かれた「在日文芸」が影響を受けるのは日本語で書かれ、日本語の呪縛と可能性に良くも悪しくも限界づけられた日本の文芸であることは当然すぎることであって、他に選択肢があったのかどうか。あるいはその影響を被ったもので「在日文芸」なるものと同じカテゴリーに属しているからこそ比較の対象になりうるグループが存在するのかどうか。

そればかりか、朝鮮の近代が日本の近代と密接な関係を持ったという歴史もある。いくら少なく見積もっても36年間の長きにわたって、政治経済は言うに及ばず、朝鮮の文字の世界は日本語の支配下にあった。朝鮮語で思考する人々も発表にあたっては日本語を用いねばならなかった。もっと年少の人々は初等教育の段階から日本語を通して思考する習慣を身につけることを強いられた。そういう現実を生きざるをえなかった人々が作り上げた朝鮮の近代文学が、それこそ必然的に日本の近代文学の影響を受けないわけがない。こういう事柄は、善し悪しの問題とは関係なく、否定しようがない歴史的事実なのである。

そういう消息を知悉しているはずの関川が専ら「在日文芸」なるものを事挙げして、その日本との、あるいは日本の近代文学との関係における「いびつさ」を言い立てるふしがあることが奇怪なのである。

ことほどさように、引用文はわからないことだらけである。あるいは言葉面は何とか捉えられても、その根拠が定かならないばかりか、早々には同意しかねる断定の積み重ねなのである。そしてその判断は全くの独語に等しい閉鎖性を持っている。他人がくちばしをはさむことを受け付けない個人的体験に想像で味付けした根拠に立脚しているのである。

もちろん分からないの繰り返しでは将があかない。なんとか議論を共有できそうな場を探しだそうと努めてみる。そして見つけたのが、小説の読者という資格なのである。関川は『由熙』を断罪し、その『由熙』は誰であれそれを手にして、その断罪の正否の判断ができるからだ。

そんなわけでその作品に対するわたしなりの「読み」を明かにして関川の評価と照らし合わせようと思っているのだが、その前にもう一つだけ根拠を明示して関川が自信をもって被歴していると看做せる事柄がある。引用文は小説集の「後書き」であり、他ならぬその小説群をこそ関川は「在日小説」として差し出しているのだから。

そこで『由熙』に入るに先立って、「在日小説」とは何かという輪郭を、関川の小説群からうかがっておこうと思う。但しわたしとしては関川の小説を批評しようなどというつもりはない。関川の「在日小説」論とその具体例である作品群を導きの糸に、関川に代表されそうな近年の朝鮮通の日本人の「在日」観の一端なりとも捉えられないか、というわけである。

ところで、執拗な繰り返しになるが、その作業はわたしの在日観の検証という性格をも帯びざるをえないからこそ、誰もたいして関心を持ちそうにもないそういう面倒をわたしは引き受けようとしている。わたしは日本に生まれ育ち、日本語でものを考え、日本語で愚痴を言い、その延長でたまにはものも書く。そういうわたしなのだから、いかに違和感を覚えるにせよ、善くも悪しくも日本の思潮なり日本人の常識なるものの影響を免れるはずがない。その影響を悪しきこと、克服すべきことと看做す「真性」なる在日朝鮮人がいるだろう。また関川のような日本人も多々いるようだ。関川に言わせれば、因習的な在日朝鮮人は日本近代文学の偏向の影響をもろに受けて、そういう「偏向」した眼で「在日」ないしは世界を見ているということになりそうなのだから、わたしもその一人として指弾を受けても仕方がなさそうな雲行きなのである。

だが、わたし自身としてはそういう批判に「なるほどそういう感じ方もあるのか」などと思いはするが、他人に成り済まして自分を評することができない。ただただ、仕方がなかった、なるべくしてこうなった、という退嬰的な気分で自らを顧みる一方で、仕方がなかったその様相をつかみとり、引き受けたいと思い直すのである。朝鮮人でありながら、日本に生まれ育ち、戦後日本の民主主義という理想に反発と憧れという相反する気持ちを持って生きてきた己を捉え直したいのである。

そんなわけだから、わたしとしては、そういうところにまで錨を降ろして、あわよくば、自分の中にあるかもしれない「よじれ」なり「こわばり」を見つけだし、それを解きほぐせはしまいか、といったところなのである。

(2) ――関川夏央の「在日小説」なるもの

さて関川の言う「在日小説」とはどのようなものか。『水の中の八月』と題された小説集には表題作の他に、形式も長さも様々な六篇の短編が収められている。形式として変わり種から話しを始めれば、先ずは「韓国からのラブレター」。これは題名通り、計五通の手紙で構成された書簡体小説である。韓国に取材旅行に出かけた写真家の現地報告の体裁。但し、その宛先が色恋の相手で、しかも二人（その一人が在日朝鮮人である）というわけで、不実な中年男が韓国での見聞を報告しながら、虚実織り混ぜた恋心を伝え、愛をねだるという寸法。この世の酸いも甘いも味わいなれて、もう正義を気取るわけにはいかなくなった男、それも写真家の眼に映る現実、つまり「生の」韓国リポートという結構になっている。したがって、語り手の「自堕落」というものは単なる風俗小説的体裁にとどまらず、この小説の真実味を支えるためになくてはならない下味と言うべきだろう。

今一つ、見ず知らずの女性から物書きを職業にしている語り手にかかってきた電話でのやりとりを中心とした構成で、いわば「電話体小説」として「一九八六年の冬」がある。真夜中の匿名の電話。間違いかいたずらかと思いきや、さにあらず。とりとめなさそうなやり取りの果てに浮かび上がるのは「在日」の孤独と無力感。

そう、最後になってやっと明らかにされる小説の背景は、あの熱狂的な「祖国帰還運動」がもたらした悲劇なのである。ユートピア建設を目指して「祖国」に我先にと馳せ参じた在日朝鮮人たちがいた。もう30年も40年も前のことである。夢というものがたいていそうであるように、この夢もまた破れる。その無残に破れた夢の実態は、かつては細々と、あるいは声を落として囁かれていたが、今やよほど狂信的な「北朝鮮」シンパを除いては公然と認知されるに至った。

行方知れずのままになっている人々が多数いて、強制収容所で亡くなったり粛正の嵐の犠牲になったのだろうとの風聞がある。あるいはまた、北へ帰った親類縁者から「物乞い」の手紙が頻繁に舞い込むという例などは在日朝鮮人なら身近で見聞きできる。そういう事実と数々の風聞を取りまとめて、「北朝鮮」が理想郷どころか飢餓と「元在日」差別と秘密警察支配によって成り立つ「地

獄」を云々され、それが紛れもない真実味を帯びるに至ったというのが昨今の状況である。

さて、この短編の匿名の女性もそうした幻想の犠牲者の血縁である。ということは彼女もその犠牲者ということになるが話はそう単純なものではない。加害者と被害者とが截然と区別されるようには世の中はできてはいない。被害者のなかにも次々と加害と被害の関係を分泌していくようになっている。

ともかく、兄がかの地で辛酸を嘗めた末に亡くなったという知らせを受けた彼女は、北へ帰る兄を放置し、援助を求めるその兄に救いの手を差し伸べることができなかった自己を顧みて、自責と悔恨に苦しめられているのである。というわけで、民族イデオロギーと政治宣伝に踊らされて夢を追いかけたあげくの無残な現実がこの短編の背景となっている。しかし、この小説が問題にしているのはそうした今になって「常識」になった「北朝鮮」の現実の様相だけではなさそうなのだ。

「北朝鮮」に帰国した肉親の死の知らせを日本で受け取った在日朝鮮人の女性が、見ず知らずの日本人、つまり語り手に電話する。この設定にこそこの作品の主張を読み取ることができそうなのである。在日朝鮮人が在日朝鮮人であるが故の悲しみを語る相手が、同胞たる在日

朝鮮人にはいないという認識が構造化されているとでも言えそうなのだ。ひょんなはずみで名前を聞きかじった物書きの日本人だけが、「在日」の悲しみを托し、その悲しみを共有できるかもしれない存在というわけである。そういう「在日」の孤独が、その種の消息に詳しい語り手の冗談めかした優しさに触れ、かすかに溶解する。そして電話は切れる。その先に彼等の美しい物語が展開することになるのかどうかは、全く見当がつかない。

この二篇を除けば、他は全て普通の形式の普通の小説である。

例えば、「青い流れのその向こう」は語り手の子供時代の記憶を再構成した物語である。

幼い頃の薄ぼんやりとした父親との遠出の記憶。だが、ここでもあの「帰還運動」が背景にある。父の密かな恋人である在日朝鮮人の若い女性が「北朝鮮」に「帰国」するために父と別れねばならなくなった。その別れを惜しみながらも、「正義」と「理想」の為にそれを合理化する二人。ヒステリックな妻に翻弄される中年男の美しいが出口のない恋愛は大義に殉ずるという「美しい形」で清算される。

母親と対照的に若く美しく知的な女。しかも、離別がもたらす悲哀の影と、夢と理想に己を賭けるその毅然とした透明感とが相乗する。心ならず秘密の共犯者に仕立てられた子供心に、その姿はそこはかとないエロチシズムの混じった夢をかきたてずにはおかない。

一方には「理想」とか「理論」に依拠する美しさ、そして他方には、実はその裏に潜み、その幻想によってこそもたらされた悲惨な現実。こうしたありきたりの二項対立の物語は、もの心ついたばかりの子供の新鮮な眼と我知らず共犯者にさせられた秘密の薄暗がりで育まれる夢、それに加えて、今や現実を知り夢を見ることが許されなくなった成人した語り手の冷静な眼といったように、二重の時間と二重の眼を媒介にしてこそ、情感を湛える。

父親に代表される「良心的日本人」の「正義」と怯惰、それと在日の夢と理想とが野合して生まれ得た美しい物語。その物語を過去のものとして封印し、決別するために書かれたからこそ、その郷愁は美しくならざるを得ない。その美しさこそが「幻想」の力と同時にその馬鹿さ加減を照らし出す。

残りの三篇は、世代は異なり、時代背景も異なるが、その時々の語り手の現在を語る一人称の小説である。

「1963年の4月」はタイトルそのままに、1963年、これまた「帰国運動」がようやく下火になりだした頃の、おそらく新潟近辺での語り手の中学時代のエピ

ソード。

成績がよく、正義感と行動力に恵まれた在日朝鮮人の女生徒とそれを取り巻く日本人の子供たち。東京の大学に通う兄が民族的正義という熱病に浮かされ、家族一同の帰国を主張する。全員が同調しているわけではない。とりわけ、祖国という言葉にまったくリアリティを持てない子供にとって、それはまるで降ってわいたような他人事のよう。だがしかし、「理論」の衣をまとった「狂信」の奔流は全てを巻添えにする。観念に捕縛された大人たちを冷静に見つめる眼を持ち始めながらも、それに巻き込まれざるをえない「健康な」中学生と、その女生徒に共感を覚えながらも、在日朝鮮人の内輪の事情に入り込めずにただただ傍観するしかない日本の子供たち。まだ戦後の民主教育という建て前がそれなりに生きていた時代の田舎の子供たちの微笑ましい生き様は、今や大昔の出来事のように感じられて、郷愁をかきたてる。

次いで、道具立てからみて1970年前後と推察される語り手の高校時代を扱った「水の中の八月」。高校三年生の夏休みである。水泳部の一員として水と格闘し戯れてきた青春も終わり、陸に上がらねばならない。大学に進学するなり就職するなり、将来の行く末を定めなければならないのである。とは言え、まだ夏休み。言わば猶予期間である。漠とした不安と期待に揺れ動く青春。陸に上がろうとするカッパたちの風景である。水の中の「詩」、あるいは確とした現実としての肉体。陸の「散文」あるいは漠とした現実。

例えば、副次的人物の教師。水泳部の顧問としては生徒たちに「魚になれ」などと肉体と水との戯れを理想化する訓示を垂れている。ところが一方ではうだつの上がらぬ教師という現実がある。その現実の手垢に汚れていながらもどこか憎めない中年男が、その現実にはそぐわない道ならぬ恋愛の果てに心中する。大層に言えば詩が現実に破れるというわけだが、もちろん、この小説、そうしたことが大仰に描かれているわけではない。

そうした教師を冷静に見つめ、それを他人事として突き放しながらも、自分たちに覆いかぶさる現実の洗礼として見ないわけにはいかない高校生たちの物語なのである。人間同士の関わりの不可解さやうっとうしさの中に身を投ずることを避けられない運命にあることを予感し、各人各様に、不安に苛まれながらもそれを手なずけようとしている。

例えばちょっと奇妙な女生徒、地方の名士の一人娘としてその土地に縛り付けられ、ふさわしい相手をあてがわれ結婚させられる将来への絶望と抵抗というわけで、

その身分にもっとも不適当な、知的でニヒルな在日朝鮮人の同級生の子供をはらむことを企て、登場人物たちにちょっとした波紋、喧嘩沙汰を引き起こすといった具合。

もっとも、その喧嘩、決して陰湿なものではなく、むしろ肉体をぶつからせる爽快感が描かれる。真綿で首を締め付けるように人をがんじがらめにしてしまう現実に対して、確とした現実感覚を取り戻させるシミュレーションとして肉体のぶつかりあいがあるといったところか。青春特有の不安を肉体の濫用によって手なずけようと試みる若者たちの物語なのである。

ところで、そういう一人として語り手の友人である「新井」という生徒がいる。資産家の親を持ち、次々と車と女性を「乗り替え」、ニヒルな言辞を弄ぶ在日朝鮮人生徒。ところがそうした奔放さの一方で、級友たちに己の出自を告白し、さらには、本名宣言をするといった生真面目さを示したりと二面性をもつ。但しその二面性なるものが相対立したり分裂しているというわけではない。己が置かれた状況を突き放しながらも、その中で「自然」に生きていこうとする健康な肉体とでも言おうか。だから、この新井、まかり間違っても、「民族」や日本の差別といった出来合いの理屈を持ち出して他を非難したり、自意識の劇を演じたりすることはない。余計なことを言えば、この三人の登場人物は関川が好きらしい昔の日活映画を想わせる。裕福な家の「妾の子」に生まれながらも「本妻」に引き取られ、優しい心根をニヒルと奔放な行動で押し隠している「裕ちゃん」とでも言えば少しはその人物像が分かってもらえるかもしれない。

次いで、１９８０年頃と思われる韓国での、日本人ジャーナリストと在日朝鮮人女性の別れを描いた「慶州バスターミナル」。今だに臨戦体制の韓国で、旅の途中で防空演習に遭遇し足止めを食らった恋人の二人。ルーティンと化した演習の倦怠とグロテスク。それが二人の関係と重なる。だしぬけに女性は別れを告げる。韓国通のジャーナリストである日本人の案内で韓国訪問していた彼女が、右も左も分からない韓国の旅を一人で始めようとする。この自立に至る経緯や心理は説明されない。しかしながら、他者としての韓国の現実の不気味さと、男女の関係の倦怠と虚ろさと他者性とが重なりあって、不思議なリアリティを醸し出している。

そして最後に、１９８０年代半ばと推察される「感傷的七月」。かつて恋人であった在日朝鮮人女性との再会を契機にした青春の清算。あの青春の傲慢と裏腹の甘えと自堕落とから、徹底的に傷つけたあげく、ついには愛想をつかされて別れたかつての恋人と偶然に出会った語

り手。あわよくばよりを戻せはしまいかという思惑が芽生える。ところが、一人で力強く生きている相手の現在を知るにつれ、それに釣合のとれそうなありきたりの自足した生活という物語をでっち上げて、再び別れる。語り手の感傷をはねつける女の健気さが印象的だ。

ところで、以上のような雑多な作品群で構成された小説集は、戦後日本に生まれ育った日本人男性の経験を綴った「私小説」的連作ということで一括できそうである。もっともこのような「語り手すなわち作者」という同一化は、わたしとしてはやましさが残る。作者がいかなる意図を持っているかはさておいて、これを関川の自伝小説として読まねばならないという謂れはない。作者関川とは自立したものとして作品を読むのが、作品さらには作者に対する最低限の礼儀だと小説の読者であるわたしは思う。

とは言うものの、関川が設定した「語り手」の人生の断片の集積という読み方くらいは許されるのではないか。北陸の一地方で生を享けた子供が、その地方での小学、中学、高校を経て大学進学の為に東京に上り、もの書きもしくは写真家になった。そういう語り手の人生の過程を追った短編群くらいの連続性を読者はおのずと感じるだろう。

さらに共通性をと言うならば、その語り手と接触のあった在日朝鮮人が必ず登場するということだろうか。だから語り手たる日本人の「わたし」が人生の途上でふれあった「在日コリアン」の様々、ということで全体をまとめあげられそうである。

但し、その在日「コリアン」なるものがこれら小説の主人公かと言えばそうとも言いにくい。主人公はあくまで語り手のように見える。語り手の憂いや不安や希望と共鳴する青春群像。またあるいは、語り手の屈理屈なりお節介なり求愛をはねつけ、現実を突きつける在日朝鮮人女性たち。どちらも問題は語り手の眼であり、語り手の屈託であり夢であり、語り手の感傷と居直りである。そしてまた、そういう語り手が生きてきた戦後日本の社会である。

というわけで、そのどれを見ても、「在日小説」などという命名の必然性を得心できそうにない。在日朝鮮人が少しでも姿を現わせばそれが「在日小説」なのか、と唖然とするようなところもあるほどだ。

ところで、過去に、在日朝鮮人が姿を現わすような小説が日本人によって書かれたことがないわけではない。数多いとは言えないが、それについて論じるだけで優に一冊の書物ができるだろう。さて、そうした小説群、そ

れが「在日小説」などと銘打たれるということは殆どなかったのではあるまいか。だとすれば、必ずしも在日朝鮮人が主人公とは言いにくいけれども、ともかく必ず在日朝鮮人が姿を現わす自らの小説群に「在日小説」なるレッテルを自ら張り付ける関川には、当然なんらかの主張があるはずだ。その主張、つまり関川の小説とその他の在日朝鮮人が登場する日本人によって書かれた小説との差異はどこにあるのだろう。

調査研究の結果などとは到底言えないし、そのうえ乱暴な図式化であることを予め了解して頂かねばならないのだが、わたしの印象ではその最大の差異は、しょく罪感の有無ではなかろうか。在日朝鮮人が登場するこれまでの日本の小説の際立った特色は、在日朝鮮人の「歪み」に戸惑いながらも、興味を惹き付けられていくうちに、ついにはその「歪み」の中に潜む「まっとうさ」を見付け出すという筋道があったのではなかろうか。そして、まっとうな人間にそうした歪みをもたらした責任が問われる。いわく、日本の帝国主義の罪科。いわく、その罪科を負わないで今なお同じ体質を保持している日本の差別社会。それは時として、しょく罪感の押し売りめいたものを思わせたし、その押し売りで作者自らの「良心的人間」というアリバイ証明の臭みを覚えて辟易する読者がいたかもしれない。

それに対して、関川の小説にはそういう臭みが全くといってない。そもそも関川の小説では「在日」が差別で苦しんでいる「ふし」すらない。経済的にも精神的にもすごく「まっとうな」在日が描かれる。ましてや日本の社会における差別といった事柄がほのめかされることもない。もちろんしょく罪意識などからは語り手ははるか遠いところにいる。そこに着目すれば、罪責感を持たない「素直な」日本人の眼に映る「現実の在日」を描いているからこそ、「本邦初の在日小説」なのだというよう

に関川は考えたのかもしれない。その限りで言えば、なるほどと思わせられる。関川の描く「在日」はこれまでの様々な小説とは一味変わった在日であり、それはある視覚から見た「在日の現在」の一側面をよく捉えていると言えそうなのだ。

しかし、である。「在日コリアンを掬い上げない在日文学」などときつい言葉を発し、それを揶揄するために書かれたと著者自らが公言したうえで「在日小説」などと命名しているのだから、まさかその程度のことではあるまい、とわたしは頭をひねるのである。

そこで、改めて、同じく「在日」を描いている小説群を参照してみる。もちろん、関川が全面的に批判しているいわゆる在日朝鮮人文学を、である。但し、文学的価値評価をするつもりはない。あくまで差異と同一を確認して、関川の主張を捉えるためである。

「在日朝鮮人文学」と関川の小説の一見して明らかな違いは、語り手のステイタスであろう。関川の小説の語り手かつ主人公は日本人であり、在日朝鮮人は個別的に個人の資格で物語に参入することを許されている。その個人たる在日朝鮮人にももちろん家庭がありしがらみもあるだろうし、そのしがらみの中での喜びや悲しみがあるのだろうが、そういう「在日」の集団的生は間接的情報にとどまる。というより、そういう集団的な生は登場人物にとってもっぱら否定的な束縛としてのみ現われる。いわく民族イデオロギー、いわく家父長制、といった具合。

それに対して、「在日朝鮮人文学」では在日朝鮮人たる語り手、そしてそれを取り巻く濃厚な血縁集団、在日の朝鮮人団体ないしは社会、そして日本の社会、さらには「祖国」といったように、語り手ないしは主人公を中心にした幾つもの同心円の世界が描かれる。世代や資質によって比重の置き方には差異はあるけれども、語り手を取り巻く血縁集団を筆頭にした集団的生の束縛と喜び、さらには、日本の社会との軋轢を抱え持って苦しむ主人公が描かれる。というより、当り前のことだけれど、「在日」の集団と日本人との軋轢が複雑に絡み合ったところに成立する人間の生を描いている。

ところでこうした語り手のステイタスの固定化は自然なようでいて実は奇妙なことだ。作者が在日朝鮮人だからといって、その眼からしか小説が書けないわけはあるまいし、逆に作者が日本人だからという理由で日本人の語り手を用いるのが必然とは言えないはずだ。在日朝鮮人は日本人の眼から己がどのように映るかを、本気に日本人の身になって考えるくらいのことをしてもよいはず

だし、逆に、そういう「私小説」的狭さに批判的らしい関川こそは、逆に「不自由な眼」をもった在日朝鮮人の眼になって日本人なり在日朝鮮人なり韓国なり朝鮮を書いてもよさそうなはずだ。理屈としてはそうであるのに、事実は理屈とおりにはならないのがむしろ通例のようである。

その理由は何か。先ずは、そのほうが書きやすいということがあるだろう。小説を書こうとするとき、誰でもというわけではないが、己と等身大の語り手あるいは主人公を設定して、己の経験や知識に想像の味付けを施して語るというのは普遍的な筋道であるようだ。それに加えて、資質というものがあるかもしれない。自分を語ることを好むメンタリティというものがあって、そういう資質が凡百の小説家志望者を生みだすし、その中からたまには優れた小説家も生まれることがある。そういう事情は確かにあるだろうが、わたしとしては、それを単に「事情」としてではなく、そういう「形」に作者の主張を読み取りたいし、そうすべきだと思っている。現われ出たことは、たとえ作者の無意識のなせる業であろうとも、やはり「小説家しての作者」の主張であると考えてもよいだろうからだ。

たとえば、従来の在日朝鮮人文学が「在日朝鮮人の眼」を通して書かれてきたのは、そうすることでしか在日の真実を表現できないという、実のところはその真偽を判断しにくい「信念」に由来していると言うべきだろう。それと同じように、関川が語り手をもっぱら日本人に設定し、「在日」を描いたという事実に、主張なり「信念」を読み取ることができるのではないだろうか。

ではその信念とは何か。関川は「在日」を「在日の眼」、少なくとも従来のそれで描くことに否定的であるようだ。例えば、関川の『由熙』評価に透けてみえるのは、「私小説的」眼差しが在日朝鮮人文学を狭く出口のない文壇的作物にしたという判断である。つまり従来の「在日の眼」なるもの、とりわけ文学的なそれは、アイデンティティとか民族主義といった観念的なものの囚人のそれだと看做されているようだ。観念の帳は現実を歪める。だから、ひとまずそういう悪しき回路を切断すべし、となる。集団主義を断ち切ること、他者の眼を導入すること、という二つの方法がその為の工夫のようで、こうして、他者である日本人から見た在日朝鮮人の個人を描こうとしたということになるのではなかろうか。そうしてこそ、「在日」は開かれ、当り前の人間の世界として見えてくるといった認識を関川は持っていそうなのである。

わたしとしても、そうした考え方に必ずしも反対するわけではない。いろんな立場、角度から「在日」が描かれることに異論を差し挟まなければならない謂れはない。しかしその関川の小説自体というより、その小説や後書きから浮かび上がる関川の在日観には、わたしは相当に違和感を覚える。だから、その違和感の由来を考えてみたいのである。

改めて関川の在日観の幾つかの特徴を、単に小説だけでなく、後書きの文章をも材料にして拾いあげてみる。

第一に、関川の小説には差別に苦しむ「在日」は現われない。後にゆっくり触れるが、差別など殆どない、と関川は後書きで記すのだが、その言葉と彼の小説は符号していることになる。「在日」の屈託なり不幸は、専ら「在日」の中に居座る民族イデオロギーによってもたらされたとされている。「在日」の若者たちは旧来のイデオロギーに束縛されながらも、そこから離脱して健康に生きようとする個人として現われる。「在日」は在日朝鮮人社会という今や実態のない世界ではなく、日本の社会でこそ生きているのだという認識があるのだろう。極端な言い方をすれば「在日社会」から孤立してこそ健康だ、といったところか。旧態依然の在日社会が生み出した数々の悲惨、それにもかかわらず個人としての「在日」は日本の社会で達しく生きているというわけだ。

第二に関川の言う「在日」は在日朝鮮人二、三世のことである。

関川の小説に出てくる在日朝鮮人は二世三世だけなのである。だけというのは、彼等が一世や在日朝鮮人の集団ないしはイメージと明確な距離を取り、いわゆる「民族主義イデオロギー」を自らのものとしていないからだ。いわば二世三世の在日の自己主張を体現しているということになろうか。そしてその二世なり三世が、「在日」であるが故の不遇を言い立てないのが、関川の登場人物のすこぶる際立った特色である。例えば、語り手と関わった在日朝鮮人女性たちが語り手に日本人としての責任

を問い乱すというようなことはおこらない。愛し合った男女がぶつかれば、愛は憎しみを倍増し、あることないこと何でも並べたてそうな気がする。ましてや在日朝鮮人の女が日本人の男の不実と自堕落に愛想をつかせば、「あんたはやっぱり日本人、どうしようもない差別主義者」くらいの悪たれをつきそうなのに、そういうことは全く起こらない。在日朝鮮人の女性たち、見事なまでに「まっとう」なのである。或いはその人物がまっとうといったことではなくて、そういうことを書かないのが作者の決意であり倫理であり主張ということなのかもしれない。

第三の特徴と言えば、単に女性だけでなく、少なくとも民族主義イデオロギーに毒されていない「在日」の人間的まっとうさである。金があり知的能力などもなかなかのものである。自堕落で劣等な「在日」は不思議なほどに現われない。その一方で、そのまっとうさに影を差す例の「民族主義イデオロギー」に対するあてこすりが頻繁に顔をのぞかせる。北への帰国を強制する「熱に浮かされた」兄だとか、日本語の勉強を禁止する祖父だとか。だから、そういうまっとうな「在日」たちの不幸があるとしたら、それは彼等が距離を取っている「民族主義イデオロギー」がその根源であるという具合なのである。また従来の日本人や在日朝鮮人知識人の在日像の虚像性が揶揄される。「在日のまともな男はすべて日本人の女と結婚する」と登場人物の在日朝鮮人は語るのである。

さて、先にも述べたように、そのように描かれた在日像にわたしとしては少なからぬ違和感を覚える。言い出せばきりがないので、小説のデテールを一つだけ取り上げてみる。「1963年4月」である。日本の学校に通う在日朝鮮人のこども、とりわけあの時代のこどもが、ためらいも力みもなく、自分が朝鮮人であることを明らかにするばかりか、家族が北へ帰国するかどうかでもめているといったことを、日本人のこどもに打ち明けるエピソード。そんなことがあの時代にありえたのかどうか、わたしは多いに疑問に思う。

だがそういう違和感を盾にしてこの小説たちが駄目だなどと言えるわけがない。わたしはわたしがどういう人間なのか知らないし、在日朝鮮人だから在日朝鮮人のことが分かるとも思っていない。世の中にはいろんなことがあって、わたしはそのほんの一部しか知らない。また、たとえ見知ったことがあっても、わたしの中の観念装置が、わたしの観念に沿わないものは消去してしまっているかもしれない。それに何より、たとえこの世の中に起

こりそうにないことであれ、小説家は想像し、それを「リアル」なお話しに仕立て上げればよい。それこそが小説家の仕事というものであるだろう。

ただ、少なくとも、わたしにとって「リアル」なものと関川にとってのそれとが異なっていることは間違いがなさそうだし、その「リアル」なものの差異は大きいものがありそうなのだ。わたしが関川の小説に「うまく書いているなあ」以上の感銘を受けないのはおそらくそのせいであろう。こういう事態をわたしの理屈で言えば、マイノリティにとっての現実と、マイノリティを見つめるマジョリティにとっての現実との違いということになる。こういう分かったようで実は何も語っていないに等しい言葉で済ますつもりはなくて、そのあたりのことは後にゆっくり書いてみるつもりだということを言っておいて、今はただ関川の書き方の特徴、そして、そうした書き方に現われる関川の在日観の実態にこだわり、そうした特徴が何に由来するものなのかを考えておきたい。

なによりも、反措定の動機、といったものを想定しなければならなさそうである。在日朝鮮人は誰でも差別に苦しみ貧困に喘いでいるというのは、観念的で時代錯誤も甚だしい物語だという主張。在日朝鮮人にも金持ちもいれば貧しいものもいる。差別に苦しみ、その怨恨でもって人生を暗く生きているものもいれば、差別など世の中にあることの一つ、たいしたことではないと言い切る人々もいる。そういう多様な現実があり、差別云々はもう耳にタコができるほどわんさと書かれたきたし、そういうことに拘泥しているかぎり進歩などないのだから、それとは別の側面を描こう、それが自分の領域だと関川は考えたのだろうか。

もしそうであるなら、関川の言う「悪しき在日文芸」の世界と関川の「よき在日小説」は二つが揃って初めて在日朝鮮人の世界が過不足なくイメージできるということになりそうなのだが、もちろん関川にそんなつもりがありそうもない。「在日文芸」をほぼ完全否定している関川なのだから、棲み分けなどとんでもない、あくまで自分の在日小説の世界が「在日」の現実だと主張しているように思われる。そしてその現実とは、差別などという「観念」や在日という「観念」とは「別の次元」に開けている現実ということになりそうだ。

それがどのような次元なのかを輪郭だけでも捉える為に、先に引用した後書きを手がかりにしてみる。「自分のことには異常なまでに詳しく、他の在日や日本人との関係には必ずしも目配りが足りなかった云々」である。他者が見えず、他者との関係が把握できなければ、他者

と同時に立ち上がるはずの自己が捉えられるわけがない。したがって、在日文芸は「自己」たる「在日」を捉えてはいないという理屈になって、その批判がどこまで正鵠を得ているのかどうかは別とすれば、関川の議論はそれ自体として見事に完結することになる。

但し、この種の言葉には少しばかり注釈が要りそうだ。他の在日とは、いわゆる民族なるものを生の規範にせず、したがって（本当にしたがって、なのかどうかは多いに問題なのだが）差別を人生の色合いを決定ずける問題とみなしていない在日たちのことだと解すべきだろう。また、日本人との関係の日本人とは、「問題としての在日朝鮮人」などとは関係のないところで生きている日本人のことである。つまり日本人総体の責任とか、日本の社会の責任などとは関係ないところで、いわば「普通に」個人として生きている日本人のことであるようなのだ。その人たちはもちろん差別などとは関係のないところで暮らしている。ましてや差別に同情するという「過剰な」思い入れを免れていて、それ故にこそ、個別的に生きている在日と自然に交渉できるし、在日の姿が過不足なく捉えられるという理屈がありそうなのだ。そういうことなら、関川の在日小説と彼の理屈とが概ねは結合しているということになりそうだ。

民族的な組織や血縁と切り離されて、日本の社会の中における「孤独な個人」、あるいは「自立した個人」としての在日朝鮮人を描いているという意味ではだから、関川の小説には「在日の現在」の一面が捉えられている。現実にそういう孤独な群れが増大している。いわゆる在日社会の空洞化、あるいは拡散化。わたしの言葉で言えば、「在日朝鮮人の村の解体」。

しかしながら、その拡散化現象が関川のような視点なり現実感覚でもって汲み尽くせるのかどうか。それが従来の在日文芸以上に「在日の現在」に竿差す可能性を内包しているのか。わたしには多いに疑問なのである。

関川には見えていないものがたくさんあるようにわたしには感じられる。あるいは、見えているのかもしれない。『海峡を越えたホームラン』を一読すれば彼には見えているとしか思えない。だとしたら、見えていても語らないこと、語れないこと、語りたくないことがあるのではないか。もしそうだとしたら、何故そういうことが生じるのか。つまり、『海峡を越えたホームラン』とこの後書きとの距離がどうして生じたのか、という問題でもある。そうした事柄を明らかにしないうちは、関川の在日観、はたまた関川の在日小説に対する判断を留保しておいたほうがよさそうだ。

しかし、その前に予め約束しておいた仕事を済ませておきたい。そう、関川と対照的な世界、つまり、自閉した日本近代文学をさらに小型に、しかもさらに出口なくして、「自閉した小説」として成立している、とでも関川なら言いそうな『由熙』の開放性を解き明かしておきたいのである。そのうえで、関川が語らない在日の世界、つまりわたしにとって「リアル」な現実を述べたほうが、わたしの言わんとするところが了解していただけそうな気がする。わたしは他人のフンドシで相撲を取るのが好きなようなのだ。というより、いくら洗濯しても元々自分のフンドシの仕立てが悪そうな気がして恥ずかしいという性癖があるのである。

ところで、最後に一言。作品を作者が完全に統御しているとは必ずしも言えなさそうである。作者と作品との間にはいつだってずれがあるものだ。関川の場合も然り、というより、関川という作者の後書きなる「観念」と関川の小説という「現実」との乖離である。

例えば「慶州バスターミナル」という作品を今一度。男女の別れが描かれているのだが、それは観念としての男を情念の女が拒否するというよくある男女の理解し難さだけが問題になっているわけではない。朝鮮や在日の事情に在日よりも詳しく、在日に対する導き手の役割を自任する語り手が、朝鮮に無知なうえに朝鮮語を全く話せない「在日」に、親切あるいはお節介の押し売りを全面的に拒否されているのである。わたしにいわせれば、男女であれ、日本と朝鮮であれ、思考が始まるのはこの理解を拒む現実の認識からであり、関川はそこから今一度考え、そして書かねばならなかったのに、ということになるのだが、関川はそこで筆をおいている。そこにこそ関川の限界なり弱さ、あるいは関川の主張をわたしは見てとるのだが、それはさておき、ともかくこれを読めば、少なくとも小説の作者としての関川には、朝鮮通の己の現実感覚や観念の胡散臭さに対する自覚がありそうなのだ。なのに、そういう作品を書いた関川が性懲りもなく、在日朝鮮人の保護者なり代弁者を気取って、今や退潮の憂き目にあっている民族イデオロギーに対する断罪を起点にして在日総体に対して「善意」の忠告を後書きで書き記しているという奇妙な構図が浮かび上がる。

こういう事態は評論家関川にとっては少々まずいことになるのだろうが、小説家関川にとっては名誉なことだとわたしは思う。関川には見えているのである、自分の位置が。なのに、何故……

(3) ――李良枝の『由熙』評価をめぐって――

「悪しき在日文芸」の代表としての『由熙』に対する関川夏央の断罪の評言を念頭におきながら、わたしなりの読み方を明かにしてみたい。但し、作品の文学的評価というものを目論んでいるわけではない。それがどのようなものとしてわたしたち読者に差し出されているのか、言い換えれば、小説『由熙』の現実を読者として素直に読み解くにとどめる。

ところで、その読解に際して、作者李良枝と作品とをひとまず分離しておきたいし、また舞台が韓国や日本という実在の土地であるという事柄も出来うる限り括弧に括っておくつもりである。これは変則的に映るかもしれないが、そのほうが作品の姿が浮かびあがりそうな気がする。そのおぼろげな「感触」を作品に立ち入って実証すること、これが取り立てて目新らしさもないけれどもささやかな野心である。

在日朝鮮人の若者が祖国を理想化してそこに赴いたものの、現実の祖国にはねとばされて、失意のうちに日本に逃げ帰った物語、これが関川の評価の源になっている要約なるものらしい。しかもそういう読み方は関川一人のものではないらしく、関川と特に民族主義的イデオロギーなるものの捉え方において対照的な人々にも共有されているようだ。

例えば、在日朝鮮人の知識人にもそういう気配が濃厚で、実際にわたしは、著名な在日朝鮮人の文学者が講演会でその種の主張を展開するのを聞いて驚いたことがある。『由熙』に「民族に対する背信」を読むような口調だった。

こういうことのようなのだ。民族的アイデンティティの獲得に失敗した若者を題材にした小説が「芥川賞」を与えられたとなれば、日本の文壇、ひいては日本の社会の「悪意」を嗅ぎ取り、その老獪な知恵に翻弄された李良枝という物語ができ上がり、それを吹聴することが責務だと考える人たちがいるわけだ。小説を日本と朝鮮の関係に還元して事足れりと考えているらしいのである。

そんなわけで、わたしは小説という現実に執着することで、一部のことかも知れないがともかく「日朝両翼」からの断罪に反措定を提出するという身の程しらずの仕事に足を突っ込むことになりそうなのだ。

さて小説『由熙』、その登場人物は三人である。由熙、彼女の下宿先で知り合い、少なからぬ関係を結ぶ語り手、そしてその語り手の叔母で下宿の女主人。それに加えてあの「玄界灘」を擬人化して付け加えたい誘惑にもから

れる。由熙がその波荒い海を往還することがこの作品の大枠であるからだ。その枠組みに重心をかけて、この物語が発動するには朝鮮と日本の歴史が不可欠である、それなくしてこの物語は成立しない、と考える人もいるだろうし、それは確かにそうではある。しかし、先程にも書いたことだが、わたしはそういう実在の歴史と固有名詞をいったん括弧にいれておきたいのである。旧植民地と旧宗主国という関係は特殊なものではない。その宗主国に生まれ育った二世と母国との関係といったこともまた然り。とすれば、これを一般化して匿名の二つの文化なり社会と考えてもよいはずである。この作品がいわゆる「韓国と日本の歴史的関係の特殊性」なるものをテーマとしているならともかく、必ずしもそうではないとわたしは読む。根拠はおいおい分かってもらえるはずである。だから、これはいわば異文化同士の相互理解の可能不可能をめぐる物語と考えても大きくは的をはずれないということになる。しないしないで申し訳ないが、この主要人物には後でまた触れることにして、先を急ぐことにする。他の登場人物に触れておきたいのである。

由熙の父と女主人の亡夫である。由熙と語り手と女主人の交通が成立するにはこの二人の存在が鍵になっている。

見ず知らずの由熙を初めての下宿生として迎えるにあたって、もちろん両者の人間的好悪というものも作用してはいるが、そういうとりとめのないものを一度除外すると、亡夫が由熙の通う大学の卒業生であったという事実が最大の要因となっている。（但し、とりとめがない印象といったものが人間を動かす要因になりはしない、などと馬鹿げたことを言っているわけではない、念の為に。）夫は死に、後に残った娘は遠くアメリカに去ってしまい、夫が精魂こめて建てた家にひとり残された女主人。極端に言えば、亡夫の記憶に生きている彼女にとって、この事実は大きい。家を守ると同じく、亡夫が愛した大学に通う在日朝鮮人の学生の手助けをすることで亡夫の遺志を継ぐ機会が与えられた、つまり亡夫と再び生きる機会が訪れたのである。

他方、由熙の父。由熙がこの地に赴き、不毛とも見える努力をする契機は由熙の父の同族嫌悪であった。その嫌悪のいわれなきことを証明するために由熙はこの地に踏みとどまっていたのだとされている。ばかばかしいといえばたしかにそうである。しかし、小説世界にはばかばかしい努力が満ち溢れていて、それを小説とは呼べないなどという小説の読者はまさかいるまい。

それにそもそもが、そういう由熙の努力がばかばかしいものだなどとはわたしには思えない。父と由熙の関係に踏み込んでみる。

父親の同族嫌悪の由来は、信頼していた同族のある人物に騙されたことであったらしい。そういうことはよくあることである。近ければ近いほど憎しみも倍増するというのは誰だって知っている人間の現実である。しかも、異国に住む人々が、その異国の社会に容易に参入することを許されないのは普遍的な現実なのだから、そういう彼らが、絶対的な強者である社会に取り囲まれた「小さな村」的な紐帯を結んで暮らしていくうちに、騙し騙される関係になるということも珍しいことではない。たとえ珍しいことであっても、実はどうでもいいことなのだが、ともかくそのあたりのことに関しては、『由熙』の世界は現実をなぞっていると考えてよい。

そういう父の姿に痛ましい思いをした由熙が、父に対していわば同族のアリバイ証明をしようとしたとされているのだが、このあたり少し飛躍があるような気がする。但し、心理的な解明をすることが必ずしも小説の条件などとは言えないし、そんなことは少し想像力を働かせれば読者にはおのずと了解できることなのだから、おそらく作者は文学的余白を配置しているわけで、その配慮をしっかりと受け止めておくべきだろう。

ところで、近しい人が口汚い罵りの言葉を口にするのを見たり聞いたりして気持ちのよい人は稀なのではないか。できれば聞きたくないというのが人情というものだろう。その心理はどのような構成になっているのだろう。単純化して言えば、愛する人物に汚れた言葉で汚れてほしくない、といったところではないのだろうか。しかもその罵倒の対象が、単に特定の個人、それも外部の個人ではなく、他ならぬ父娘も含まれざるを得ない同族一般ということになれば、罵倒は父自身、娘自身にも跳ね返ってくる。理屈としてはそうなるし、由熙もまたそのような感じ方をしたのではないだろうか。

そういう父娘の振るまいなり感じ方を異常だとか誤りと断ずる人もいるかもしれない。「血なる観念」の落し穴にはまった繰り言という評価が出てきそうである。しかし、ある社会のマイノリティがついつい縛られてしまう観念なり情動というものがありそうなのだ。わたしは在日朝鮮人二世で、そういう自分に照らし合わせてそう思う。それは客観的に見れば、過誤を云々できるかもしれないが、人が生きている現実というものは正誤を云々する理知的客観とは必ずしも重なりはしまい。当人にせよ、それが理屈にあったことなどとは思っているはずがない。いないがそうなってしまう。情動に翻弄される生というべきだろうが、それもまた人間の生の一側面であろう。

他ならぬ父を、そして「わたし」を罵倒する父の言葉に聴覚を奪われながら、父を、そして己自身を救いたいと考えることが異常だとは思えない。ただし、それがどのような形をとるのかはその人次第である。由熙にあっては、それが父祖の地の文化を了解しようとすることに求められたにすぎない。これを飛躍とする見方があるかもしれないが、それは彼女が見つけた一つの選択と了解すればよいのである。それをアイデンティティの眩惑などと余計なことを言いたくなるのは、アイデンティティ捜しという流行に飽いた果てに作り出された「アイデンティティ空虚説」といういまひとつの流行をなぞるだけで、実は小説について何も言っていないに等しい。そういう烙印はひとまず差し控えておいたほうがよい。

ついでに言えば、この小説をいわゆる「差別」云々の問題に還元して読む必要などないとわたしは思う。そういう読まれる方を忌避するためにということでもないのだろうが、作者は由熙の留学の動機を被差別体験に由来するものとして書いてはいない。動機は父娘の関係に限定されている。そういう書き方に批判的な読者がいるかもしれない。日本における「差別状況」に目を塞いだ結

果だというように。しかしながら、直接的な被差別体験など皆無だとする感じ方なり言い方は、在日二世三世の中で決して特異なものではない。差別を声高に主張する人たちだけが在日朝鮮人ではない。そういう類の感じ方に異論を唱えることはできなくはないが、だからといって、この小説が日本の社会への妥協を抱えもっているといった風にしてこの小説を読むわけにはいかないのである。先にも述べたが、この由熙なる人物は基本的には在日朝鮮人二世のある種の典型をなぞっているといえそうなのである。

但し、同族のアリバイ証明をするためにわざわざ韓国にまで出かけなければならなかった、という小説の経過の裏には重要な事柄が潜んでいる、とわたしは思う。由熙の周囲に父親の断罪を転倒できるような「同胞」が存在し、それを彼女が認識できれば、わざわざ父祖の地にまで出向く必要はなかったはずだ。なのに由熙にその必要が感じられたということは、彼女にはそういう存在が見えなかったということを表わしている。見えなかったのには幾つもの理由が考えられる。いなかったのか、いたのに見えなかったのか。いなかったとすれば、それは在日の拡散、孤立という状況がそこには組み込まれているということになる。見えなかったとすれば、それは彼女が父親の眼、さらには日本人の眼を内面化していたということになる。「在日」は在日を否定する日本の社会の眼を程度に違いはあれ内面化してしまうものなのだ。そしてその日本の社会の眼は二重構造になっている。朝鮮人は劣等だ、が第一段階。それに加えて、「在日」はその朝鮮人のなかでもさらに劣等で、半人前の朝鮮人、というようになっている。由熙が差別を云々せずとも、見事に彼女の眼は日本人の眼の反映になっているということになる。だから彼女は「ほんものの朝鮮人」を求めて韓国に旅立たねばならなかった、ということなのだろう。

ともかくそういうわけで、この小説が五人の登場人物の関わりを巡る物語であるという枠組みを設定したうえで、語り手であると同時に登場人物でもある女性について考えてみる。

わたし一個の感想を正直に言えば、この人物こそが特異に感じられる。

たまたま同じ家に住むことになった年下の留学生とのわずか半年ばかりの交際によって、これほどまでにその学生に肩いれするこの女性、そしてその女性に殆ど体を預けて「甘える」由熙、この関係に作り物めいた違和感を抱くのはわたし一人だろうか。

さてしかし、その違和感ははたして小説を素直に読んだうえでのことであろうか、と思い返してみる。

由熙は既に4、5年にわたる辛い留学生活を送っており、女三人の静かなこの下宿先は、辛苦の果てにたどり着いたいわば夢の島である。そこで安らぎを覚えた彼女は「武装」を解く。そしてその長い武装があったればこそ、反動のように甘えの奔流のようなものに身を任したという筋道は、現実の「韓国」でそういうことが起こりうるのかどうかという可能性をひとまず括弧でくくれば、決して了解不可能なことではない。再三の繰り返しになるが、人間の心理の自然をなぞっていると言ってよさそうなのである。

一方、由熙が「姉さん」と呼ぶ語り手の女性のいれ込みはどうか。「韓国」という社会における人間関係の類型という問題、そしてもう一つ、そういうものと切れるはずもないけれど、一度切り離したうえでの彼女の心理状態というものを考えてみなければなるまい。

偶然に同じ屋根の下に住むようになった留学生に対する彼女の関わり方は尋常ではない。彼女は大学を出て就職して12年あまり、30歳を越えている。分別をわきまえ、他人との距離の取り方を習得している彼女が、読者から見れば過剰なほどの入れ込みをする。献身的といっても

『書評』編集 STAFF募集!!

『書評』は私たちによる文化形成のための印刷メディアです。あなたも『書評』を創ってみませんか。

「雑誌」に興味のある方、思想・文化活動をやってみたい方は、『書評』編集をはじめ、講演会や映画上映のSTAFFになってみましょう。

私たちは、いつでもあなたをお待ちしています。

★連絡先　〒565-0842 吹田市千里山東3-10-1
関西大学生活協同組合組織委員会内（本部棟3階）
『書評』編集委員会
☎(06)6368-7530(直通)
☎(06)6368-1121(内線7435)
e-mail:kucoopor@sun-inet.ne.jp

よい。この事態を作品はどのように描いているか、そしてわれわれ読者はどのように得心するか。

韓国の社会が血縁、地縁、門閥、学閥のネットワークが隅々まで張り巡らされた共同体的社会であることはよく知られている。内部における濃厚な関係、そしてそれと裏腹の「他者」に対する敵対意識もしくは無関心、そういうものが韓国の社会の基本的な構図だそうだし、わたし自身の狭くて短い経験からも、相当に信ぴょう性がありそうに思える構図である。それに加えて、在日朝鮮人に対する必ずしも謂れないものとは言い切れないが、それでも「偏見」としか呼びえない固定観念もある。朝鮮語もしゃべれず、憎き日本の経済的繁栄のおこぼれをもらって慢心している無知な狼籍者といったところか。在日朝鮮人は「パンチョッパリ（半日本人）」というわけである。

ところで念のために言い添えれば、このチョッパリという言葉は、獣に等しい人間という意味で日本人に対する侮蔑語である。だから「半」は半分獣という意味で、その意味を和らげた表現ということになるのかといえばそうではない。日本人は憎悪の対象、もしくは友好の相手として対等であるのに対し、パンチョッパリは獣の名にも値しない存在という意味を含意している。

そういう現実を持ち出して、この語り手と由熙との関係と照らし合わせれば、異様である。もしそういう現実とこの小説世界との接点を見付け出そうとするならば、女主人の亡夫の存在以外に何者もない。学閥はこの社会の大きな力だからだ。この接点を通じて、由熙は一挙に女主人とその姪たる語り手の「内輪」に入り込んだということになる。これは幸運な事態と言わねばならない。そしてなるほど、こういう幸運をそれとして作品は描いているのである。由熙がそこに到達するまでに長年の辛い遍歴を要したことが報告されているのである。

もっとも、わたしとしては現実の韓国という枠をいったん取り払って、この作品を読み解けばどういう構図になるかを問題にしているのだから、そういうところで話を展開するのは二枚舌の誹りをうけかねない。そればかりか、「身内」意識は必ずしも「韓国」の現実には還元できないところに生じていることが作品を読めば了解できるはずなのである。作品に戻らねばならない。

語り手の由熙に対するいれ込みは好意や同情を越えている。しかしそれには個人的な事情が作用している。それはいわば待ち望まれたものとの遭遇だった。婚期を逃し、淡々としてはいるが何か閉塞した日常を送る彼女は、無意識のうちに何かを待ち望んでいる。明確にそれとは

意識されなかったその待機状態というものが、回想つまり再認識の過程でおぼろげながら浮かび上がってくる。

待ち望んでいた語り手の前に、由熙が現われたのである。対他関係における欠落とでも呼ぶべきものを語り手は隠し持っていた。そのなんとか内部に秘めた欠落を、まるで拡大し、さらけ出して生きているのが由熙である。その自分の写し絵の手助けをすることは、彼女にとって一種のセラピー的な性格を帯びている。だからこそ、彼女は尋常ならざる献身的努力を惜しまないし、その克服に失敗した彼女を許せないのである。それは彼女自身の失敗でもあるからだ。そう、彼女はたしかに失敗したのである。しかし、それが拭えない失敗なのか。また失敗の告白として作品が提出されているのかどうかは落ち着いて考えてみるべき問題である。この小説の源には失敗がある。しかしそれは到達点ではない。

とりたてて新奇な形式でもないのだが、この作品は回想を中心としながら現在が語られるというように、回想と現在の二重の時間構成となっている。生きられた時間つまり過去を回想しながら、それを再認識しようとする試みの報告なのである。認識の対象は由熙であると同時に語り手の自己でもあるのだが、こういう再認識というものは、生きられた時間を固定させるのではなく、むしろ、それをこれから生きられる時間、つまり未来に生かそうとする志を内包している。不断の解釈が、過去を未来へと開いている。

ところで、由熙の痛々しい努力は「空しい」ものとして描かれている。共感あるが故の批判的まなざしに晒されている。しかも、たんに語り手という他者から批判されているばかりでなく、その回想の内容を素直に読めば、由熙自体がその空しさを自覚していることを疑うことは難しい。そういう形での努力の無効性を自覚しながら、他の方法を試す力を欠いているからこそ、由照はその場を去る。しかしそれが決定的なものかどうか。

むしろその逆ではないのか。由熙の無駄な努力は、その無駄さと無駄でしかありえなかったその必然の両面から光りをあてられている。その光の下で、何かが見えてくる。無駄の集積からこそ生まれるかもしれない果実こそがむしろこの作品から現われてくる。語り手の回想自体がその果実なのだということが次第に明らかになる。

そういう不可解な他者を認識しながら、同時に「わたし」自身を認識しようとする語り手を持てたということは、勿論由熙にとって稀な幸運というべきであり、その「認識者」を媒介にした由熙の再度の企ての可能性をわたしたちは予見することができる。そういう認識の努力

の過程そのものが語り手の感情教育にもなりえているのであるから、語り手と由熙が新たな形で、つまり失敗の経験を内部に繰り込んだ関係を作り出す可能性もまた排除されるわけではない。

由熙と語り手の関係が幸福に包まれたものでなくても、他者の理解、異文化の理解というものが取りうる一つの道筋として、それが最悪のものだなどとは言えない。ましてや無駄で出口のない努力の告白などという作品ではないとわたしは思う。奇を衒うつもりはないのだが、わたしの読後感は明るいものだった。

だからこの作品がアイデンティティという流行のテーマに翻弄されたものだ、などとはとうてい言えないとわたしは思う。

少し角度を変えてみる。由熙のつまずきの原因でもあり、その最たる現われでもある言葉に対する由熙の関わりを見ることにする。

ある対象に対する違和感なり拒否反応は一部に限定されることもあるし、全体的な場合もある。しかし、その両者に截然とした境界があるわけではない。白い和紙に一点の墨汁が落ちると、徐々に白を浸食していくように、些細な違和感が次第に膨れ上り、何もかもが我慢ならなくなったりする。「えくぼもあばた」という具合なのだ。もしそうした浸透が食い止められるとすれば、その黒点をせき止めるような別の何かが必要とされる。情動とは別のところから発した防波堤、知性や倫理の介入があって成立する。「えくぼはえくぼ、あばたはあばた」。こうして「全般化しようとするわたしの嫌悪は非合理だ」という修正の手続きが行なわれる。

その逆に、一見しただけで、全てが嫌ということもあるだろう。その場合でも、その拒否感を自分で納得するために、一部に限定するようなことがある。「少なくともここがこうなのだから、わたしが嫌悪感を抱いてもそれは当然なのだ」というように。

だから、そうした情動と知性のせめぎあいによって作り出されたシンボルが、由熙の場合は言葉なり音であったにすぎないといえば話は簡単なのだが、ところが実はこれはもう少し立ち入って考えて見なければならないようだ。

由熙の韓国訪問は積極的な意志に基づいていたはずである。ところが、その意志が傷つき、受動性を色濃く帯びてしまった。その時点で由熙の悲劇は既に決定づけられてしまったというべきである。

では何が傷ついたのか。先ずは聴覚なのである。そして聴覚はもともと傷つきやすい。耳をふさいで生きるこ

とは難しい。その難しさは臭を拒否するのによく似ている。鼻と同じく耳は選択しないし、できない。聴覚の受動性ということに、由熙の受動性がよく現われている。

傷ついた耳。翻って考えてみると、音はそもそもこの物語の初源にあった。由熙の韓国訪問の動機は父親の同族嫌悪の言葉にある。その言葉の意味レベルの内容をなおざりするわけにはいかないが、それよりむしろ問題は、その言葉が書かれた言葉ではなかったことだ。「話され」「聞かれた」言葉なのである。その音声に傷ついた由熙はその傷を癒そうとして、その傷から出られない。音に捉えられ、それから逃れようとひたすら耳を済ましている。いわば嫌悪を倍加するために、あるいは恐れを募らせるために生きている。

滑稽であろうか。悲劇的であろうか。どのように言おうと同じことであるようにわたしには思われる。傷というものはそういうことだからだ。但し、その傷によって由熙が死に絶えているわけでもない。由熙の積極的な意志の残滓たる眼が、耳の傷の浸食によって瀕死になりながらも生きている。苛烈な姿であっても、朝鮮の歴史と文化の本源の姿を象徴しているような岩山を「見る」ことに由熙は喜びを見い出しているのである。そういう眼と耳の拮抗があればこそ、傷の認識への道が険しいものであっても残されている。由熙の内部の葛藤あらばこそ、「姉さん」は感能する。その言わば精神的双生児によって、その傷の有り様への批判的認識の可能性が探られる。傷の癒し方が模索される。

そう、この小説は既に傷ついてしまった精神の一つの有り様を描いている。但し、既に述べたことなのだが、それはそういう精神の告白といったものではない。傷ついた精神の癒しの探索の過程なのである。

ところでそれは一個の具体的な人間の傷ついた精神のその後であると同時に、歴史や運命を否応無く引き受けざるを得ない人間の「宿命」という普遍的な人間の物語でもある。歴史といおうと社会といおうと、その現われは具体的な個人の形を成して現われる。傷ついた歴史(ところではたして傷つかない歴史などあるだろうか)が傷ついた人間の形をとって現われる。そういうものとしての傷がいかにして癒されうるのか、それがいわばテーマなのである。

その癒しが何を媒介にして可能か。他者の存在である。関係の所産である傷が自閉した一個の精神なり一個の社会内部で癒されることは考えにくい。その傷を再生産するかもしれない他者との遭遇、そこに癒しの可能性を賭ける、いわば捨て身の跳躍がこの作品である。他者に巡

り会い、失敗に終わった遭遇の形をとりながらも、実はその失敗にこそ、癒しの芽が育っているのかもしれないという希望を、わたしは読み取る。

誰もが自らが預かり知らない生を引きずっている。それを意識するかしないかだけの違いはあるけれども。意識してしまった人間はそれを癒そうとするだろう。ところがその努力がかえって傷を深くするということもよくある。

そしてその傷を抱えて由熙は逃げ帰ったということになりそうなのだが、本当にそうなのだろうか。「逃亡した」由熙を笑う人もいるだろう。しかし人が笑おうと笑うまいと由熙は囚われている。その囚われ方を書くことが認識の助けを借りて解放の手だてを探ることになるのではないのか。

起こったことを元に戻すことはできない。囚われたという事実を消すことはできない。しかし、時間がある。時間には自由が内包されているのだから、人は永遠にやり直しがきく、その可能性だけは残っている、傷は癒されうる。その希望は残っている。

こういう言い方を取ってつけたような御為ごかしと受け取る人もいるかも知れないので話をしつこくしておいたほうがよさそうだ。

わたしの議論は専ら形式にこだわっている。しかし、それを形式的議論として一蹴するわけにはいかないはずだ。『由熙』という小説はそういう形式で差し出されている。その形式が充分に生きているかどうかという問題

が残りはする（そこでこそ文芸批評の仕事の領域が始まるのだろうが）。しかし、少なくともそういう形式を無視するわけにはいかない。作家はこの形式を探し出した。この形式と遭遇したからこそ『由熙』という作品が書かれたに違いないのである。だから、この形式こそが作者の告白なのだ、くらいの読み方をひとまずしてみるのが作者と作品に対する最低限の礼儀ではなかろうか。小説は観念ではなく現実であるという関川が口にしてもおかしくない言い方をもじるなら、この小説はこの形式あっての現実なのである。

誰にでも好き嫌いがあるし、何がリアルかということについても人それぞれに感じ方に違いはあるが、そういう趣味の問題を一般化して他者を裁くわけにはいかないし、普通はそういうことは思いとどまるものだ。ところが、それがある先入観と結びつくとき、デマゴギーに限りなく近づいてしまう。図式的な近代文学批判、あるいは在日朝鮮人文学批判、さらには在日朝鮮人のなかにある硬直した民族イデオロギーの単純素朴な反映として小説を読むことなく、小説の現実を読み、それと「在日小説」なるものの観念と照らし合わせるくらいの労力を惜しまなかったならば、いくらなんでも「死人に口なし」を想わせるような断罪は出てこなかったのではなかろうか。

だから死者になりかわって関川に鉄槌を、などと考えているわけでない。たとえ作者がこの世にいなくなっても『由熙』は存在し、作品自体ばかりかその生みの親である作者を断罪する関川その他の議論の是非を糺すだろう。だから、わたしのような者が横あいからしゃしゃり出るまでのこともない。それに批評と作品との関係においてこの種の誤解、歪曲はさして珍しいことではない。読者は差し出された作品を勝手気ままに読んでかまわないと、ひとまずは言えるはずだから。ただし、きちんと読まずに勝手気ままなことを書き散らす評者もまたわんさといて、そのでたらめにどこまでつきあえばいいのかちょっと困ってしまうのだが、自らを顧みて、「誰だって身すぎ世すぎの為なのだから、お互い様」などと苦笑いでも浮かべて放っておくしかあるまい。

ところがである。こうした『由熙』評価を前振りにおいての、在日朝鮮人一般に対する議論は、たとえ善意から発せられたとしても、異論を提出しておきたい気がする。今度は、代理人ではなくて当事者なのだから、やっと奥歯に物がはさまったような物言いから脱せそうなのだが、はたしてどうなることやら。

（ヒョン　ソニュン・大阪経済法科大学アジア研究所）

■短評■

「ウィニングボールを君に」

山際　淳司　著

角川文庫／定価七二四円

私は、最近までほとんど本を読まなかった。それは読んでみたいと思う本に巡り会わなかったからだ。大学生になり、教授や友人から、「読書をしておいた方がいい、この本が面白い」と薦められたりしたが、結局読むまでにはいたらなかった。しかし、そんな私が最近、急に本を読むようになった。そのきっかけになったのが山際淳司の本である。

山際淳司を読もうと思ったのは、「知ってるつもり」で山際淳司を取りあげているのを見てからだ。そこで紹介されていた彼の言葉や考え方は、育ってきた時代、環境が違う私にも共感できるものが多く、すぐに山際淳司という人間に惹かれた。そして、彼の本を読んでみたいという気持ちが湧いてきた。すぐに本屋に行き、彼の本を数冊買って読みはじめた。これまでほとんど読書をしてこなかった私でも、すらすら読み進めることが出来た。それは、短編集であったという事もあるが、それ以上に書かれているテーマ、内容が興味深く、途中で飽きることなく読めたからだろう。買った数冊はすぐに読み終わってしまった。彼の作品をこれからもどんどん読んでいきたいと思った。しかし、彼はもうこの世にはいない。彼の新しい作品が出ることはもうないのだ。

今回は、彼の最後の作品集となった「ウィニングボールを君に」を紹介する。この本は彼の死後、刊行されたもので、彼の出している他の本と同じような短編集なのだが、私はそのタイトルが非常に気になった。「ウィニングボールを君に」というタイトルは編集者が彼の最後の作品ということでつけたのか、それとも彼自身が最後になると予想して付けたものなのか。どちらにしても、私にとってこの作品は、彼の最後の作品ということで印象に残る一冊だっ

た。

その中でも私が最も印象に残った、『プロ野球「黒い霧事件」選手の復活を夢見て』という短編を紹介する。

甲子園の選抜大会で優勝投手になった下関商業の池永正明は、ほとんどのプロの球団から誘いが来た。そして一九六五年、当時としては破格の五〇〇〇万円の契約金で西鉄ライオンズに入団した。1年目から二〇勝を挙げ、新人王を獲得し、五年目までで九九勝を挙げた。しかし、これだけの好成績を挙げながら彼は六年目でプロ野球界を去ることになった。肩を壊したわけでもなく、再起不能のけがをしたわけでもない。彼はまだ十分に投げることが出来た。それでも池永はユニフォームを脱ぐことになった。野球賭博が表面化し、その騒ぎの中で池永の名前が登場したからだ。結果、彼はコミッショナーによる永久追放処分を受けた。野球賭博に関しては、その後、数人の選手達が略式起訴され、略式命令で罰金二万円という処分を受けている。池永の場合、その略式起訴すらされなかった。彼の場合、先輩から預かった一〇〇万円が問題になったのだ。先輩選手から預かってくれと言われた金をその場で突き返せば先輩の顔を潰すことになってしまう。池永はやむなく受け取ったのだ。具体的に八百長を仕込んだのではないが、その場では突き返せない金が池永の所にあったのは間違いない。

彼は現在、博多に店を出し成功している。ゴルフはハンディが一になるまで上達した。「日本アマに出場しようかと本気で考えたこともあるが、やるならば勝負に勝ちたい。全てをなげうってそこまで本気にならないと、自分らしくない。」そこまで出来るだろうかと自問した結果、諦めたそうだ。また、百万円を預かってしまったことに対して、池永はこう言っている。「説明できんことですね。説明できんちゅうことは疲れますね。」山際は彼がさばさばした口調でそう言っていたのが、「耳の底に残っている」と書いている。

池永の、過去に固執せず前向きに生きる生きる姿勢や、それを伝える山際の文章に感心した。山際はドラマティックな話でも、読者を煽るよ

うな書き方はしない。話自体が面白いのだから、変に文章を飾ることなく、ありのままを書くように心がけていたのだろう。また、選手の動作、表情、口調等を細かく描写し、心理まで読みとっている。だから、読んでいると知らぬ間に引き込まれ、それでいて全く読み疲れない文章なのだ。

作品の最後に「時がいとおしく思えた」という彼のエッセイが収録されている。それによると彼は仕事を始めてしばらく、時計を持たなかったそうだ。それは、彼が「時」は勝手に流れていくもの、人は所詮、時を支配できるわけがないと考えていたからしい。そのうち彼に転機が訪れる。物を右から左に動かすような仕事をしながら、時間だけがどんどんたっていく日々。そんな日々にうんざりしていた彼は、「時」の流れるままにやり過ごすのではなく、その「時」の流れに、棹ささなければ（抗しなければ）ならない時があると、気付いたのだ。そのことが彼のターニングポイントとなった。それから彼の仕事のスタイルはガラリと変わった。

彼はエッセイの最後をこう締めくくっている。「いつも同じペースで生きるのではなく、時折意識的にターニングポイントを設定するべきなのである。僕はそう思っている」

このエッセイを読み、自分自身の生き方について考えさせられた。私も時間を無駄に使っているのではないか、何となく日々を過ごしているのではないか。そう考えた時に、私も受け身の姿勢ではなく、時間を積極的に使っていこうと思った。

私にとって、彼の作品を読んだことがターニングポイントになった。

（谷井康彦・文学部一回生）

■短評■

「子どもの本を読む」

河合　隼雄　著

講談社＋α文庫／定価八一六円

この題名を見たときに、どのようなことを皆さんは想像するだろうか。著名な心理学者である河合氏が、なぜ「子どもの本」を批評するのか不思議に思う人もいるだろう。河合氏は序論でこう述べている。『心理療法も、子どもの本も、われわれがこの世に生きるということの本質にかかわってくるのであり、その点において不可分に結びついていると思うのである。』

この本は「短評集」だが、一般にいわれる書評とは性質の異なるものである。というのは、作品が描かれた背景や同じ作者の他の作品についてはほとんどふれられることなく、きわめて主観的に、河合氏独自の読み方で批評がなされているからだ。本書から引用すると、『本を「読む」ときに、私は自分が心理療法をするのと、ほとんど同じことをしているのである。その作品の「世界」に入りこんで、そこで感じとったことを言葉にしているのである。』河合氏は、自分が心理療法をするのと同じ手法で「子どもの本」を読んでいるのだ。言い換えれば、心理療法家としての河合氏が、ひとつひとつ作品を診察しているのだとも、いえるかもしれない。

心理療法家が心病む人々と接する際には、相手の話をよく聞いて、信頼をえることがまず第一歩だろう。自分の苦しい状態を訴えても、相談相手に話の腰を折られたり、同調してじっくり話を聞いてもらえなければ、とても再訪する気にはなれない。心理療法家は腰をすえて聞くことで、当人の主観の世界に可能な限り入りこみ、それを共有できるようにつとめるのだ。もちろん、当人の主観に完全に浸かりきったままではいけない。河合氏の言葉を引用すれば、『これは危険に満ちた道で、うっかりすると両者共倒れになる可能性が高い。そこで、われわれはその器量に応じて、ちょっと客観の世界に目を走らせたり、片足を外の世界にかけたりしながら歩いてゆくのである。』このようにして、心理療法家は当人とともに主観の世界を進みながらも、時おり客観の視点をとりいれることによって、そこに沈みきってしまわないようにするのである。そうして両者がそろりそろりと進んでいく過

程で、主観の世界から新たな道がひらけてくるのである。

「子どもの本」を読む際にも、河合氏はこれと同じようなことをしているのだ。作品の世界に没入することに全力を注ぐ一方で、『心理療法のときと同じで、あまりにも危険度が高まらない程度の配慮は、ある程度行っている』のである。

本書には十二の作品が収録されており、このような河合氏独特の読み方によって、それぞれが丹念に解説されている。作品に登場する子どもや動物たちの微妙な心理や世界観、そして知らず知らずのうちに彼らが成長していく様子が、非常に分かりやすく述べられているのである。自分自身が子どもであった頃を思い出してみると、作品の登場人物と同じ行動や考え方をしていたことがはっきりと認識できるだろう。子どもは、行動している最中は常に無意識に近い状態であることが多く、自分の姿を客観的に見つめて考えるというような機会は、それほどないと思う。私自身、子どもの頃にどのような行動の仕方をしていたかについてはあまり記憶がなかった。本書のなかで、河合氏の子どもへの深い見識にふれれば、ああそうか、あのときは確かにこういう心理で動いていたなと、非常に納得してしまうのである。

そして、河合氏が作品の世界に入り込むのと同じように、私たちもまた、いつの間にかその世界に引き込まれているのだ。しかもそこは「子どもの本」の世界である。常識では決して考えられないような事が起こっても全然不思議ではないし、何が起こるか予測がつかない世界なのだ。

河合氏が「子どもの本」を批評する理由は、ここにあると思う。名作といわれる文学作品はいくらでもあるが、あえて河合氏が「子どもの本」を選んだのは、子どもの世界、子どもの視点を再び取り戻すことができるからだろう。この本は、そのきっかけを与えてくれるのだ。

子どもは、大人の見ている現実とは異なった現実の姿を見ているものだと河合氏は述べている。大人にとってはくだらない事物でも、子どもには何事にも代え難い重要な意味をもつものであったりするのは、よくあることだろう。河合氏は『現実というものはきわめて多層的であり、それはさまざまの真実を包含していると考えられる』と述べて、「現実の多層性」という言葉でこれを説明している。つまり、子どもと大人とでは、体験する現実の層が異なっているのだ。

大人の場合、現実はきわめて単層的な様相をしている。現実社会で大人になるためには、必要な知識や技術を習得し、その機構に適合する存在となってゆかねばならない。その過程を無自覚に生きてゆくことで、大人の目は現実を単層的にしか見なくなってゆくのだろう。

単層的といっても、大人の見ているものはすべて偽であり、子どもは真実だけを見ているというわけではない。子どもは、現実を多層的にとらえられる視点をもっているのである。現実の姿がひとつでないとすれば、一般的な常識など通用しないことも多々あるはずだ。年齢を重ねて「大人」になるにつれて、そういう視点を失ってしまうのは、やはり残念なことだと思う。

読もうと思えば文学でも哲学でもあるのだから、今さら「子どもの本」なんて幼稚だ、という人もいるに違いない。しかし子どもにとっての現実世界を、幼稚などという言葉でひとくくりにしてしまう事は、十分な説明といえるものだろうか。脱税や不正献金、組織的隠ぺいなどで新聞やテレビをにぎわしている、社会の「最先端」にいる大人たちの姿を考えてみよう。はたして、彼らと子どもの一体どちらが幼稚な存在といえるだろうか。

知識を身につけ、実社会での経験を積んで、有能な「大人」として生きてゆくのも悪いことではない。しかし一方で、現実を多層的に認識し、既存の見方では割り切れない世界の存在を知っておくことは、決して無駄にはならないだろう。本書を読むことで、それを実感できると思う。

（乗道　盛・社会学部二回生）

編集後記

読者の皆さん、『書評』115号をお届けします。

「若者の活字離れ」が問題になって早幾年。その背景には様々な要因があるのでしょうが、とにかくこれがゆゆしき事態であることは明らかです。

私は、文化には「活字＝文字」が深く関わっていると思います。なぜなら、人は思考を言葉によって行い、それを言葉で整理すると思うからです。

本＝活字は、「知識」を伝達・獲得するための道具です。誰かが或ることについて思考し、活字にする。それを読んだ人が思考の成果としてある「知識」を「享受」する。そして、自分のことや社会問題について認識・思考し、生活をより良いものにしていく。

一方私たちは、社会問題に対して「自分には関係ない」と思いがちです。それは、社会問題と私たちとの関連性に気付いていないだけなのではないでしょうか。そして、私たちの「活字離れ」が、その大きな要因となっているのではないでしょうか。

今回の書評には、多くの思考の「成果＝知識」が掲載されています。私たちと社会との関わりを考える指標の一つとされてみてはいかがでしょうか。

（野島壮司・学生）

※梁永厚先生の御都合により、「在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート」は休載とさせていただきます。御了承下さい。

109号

〈特集〉　教育問題
- 大学改革を考える
- 大学はどこへいこうとしているか
- 大学教育の落とし穴
- 我国の科学技術政策と高等教育
- 情報社会における教育を考える
- 近代日本における朝鮮語の教育と研究

〈寄稿〉
- 金文輔と「犬養倉衛」

〈連載〉
芝田　稔／山村嘉己／芝田啓治／蘆田東一／三谷　真

110号

〈特集〉　読書案内
- 自家製「読書のすすめ」
- アードルフ・ヒトラーの「わが闘争」
- 人はどのようにして自分になるのか
- 「道楽」本位
- ラッセル・ポパー・グッドマン
- 自然との付き合い方を見直そう
- タコ壺よ、さらば
- 若い時こそ小説を

〈特集〉 教育問題（続）
- 悲劇の散乱

〈講演録〉
『キャンパス分断の問題性』

〈寄稿〉
- 「ひどさ」については、シバさんあなたも敗けていませんね。

〈連載〉
芝田　稔／山村嘉己／芝田啓治／梁　永厚／蘆田東一／三谷　真

111号

〈特集〉　読書案内
- 「インターネット法律問題Q&A集－「サイバースペース法」入門」　山下幸夫 著
- 人権問題をめぐる本の紹介

〈連載〉
芝田　稔／山村嘉己／芝田啓治／梁　永厚

112号

〈特集〉　読書案内
- 現代版「読書のすすめ」
- 『「世界」主要論文選 1946-1995戦後50年の現実と日本の選択』
- 時代を読む
- 『大学改革を探る ―大学改革に関する全国調査の結果から』

〈連載〉
芝田　稔／山村嘉己／芝田啓治

113号

〈特集〉
短評…おすすめの本6冊
- よくわかるダイオキシン汚染
- いじめ　教室の病
- ドイツを変えた 10人の環境パイオニア
- 文学入門
- 生きるための学校
- 母は枯葉剤を浴びた

〈連載〉
芝田　稔／山村嘉己／芝田啓治

114号

〈特集〉　読書案内
高森八四郎／木岡伸夫
森岡　孝二／柴　健次
舟場　拓司／黒葛裕之
山本　秀樹

〈連載〉
芝田　稔／山村嘉己／芝田啓治／梁　永厚

季刊　「書評」　1999年 12月　通巻115号

編集・発行　関西大学生活協同組合・組織委員会内『書評』編集委員会
連絡先　吹田市千里山東3-10-1（☎06-6368-7530 or 6368-1121（内線74355））
e-mail:kucoopor@sun-inet.or.jp
頒価　250円